松本市文化財調査報告No.33

推定信濃国府

——才二次調査報告書——

1984.3

松本市教育委員会

推 定 信 濃 国 府

――牙二次調査報告書――

1984.3

松 本 市 教 育 委 員 会

序

昭和56年度の惣社宮北遺跡の調査に端を発した推定信濃国府発掘調査は、57年度より国・県の補助事業としてとりあげられ、本年はその第2次調査として行われたものであります。

本年度は指導体制を整え、木下、山中、桐原三先生からご指導を受け、発掘調査では昨年度に引き続き農林水産省蚕糸試験場中部支場のご好意により惣社第三桑園内の一部を調査させていただき、分布調査では惣社町会のご協力を得て惣社地籍内をくまなく調査させていただきました。

調査の結果については本書に記したとおりであり、信濃国府の所在を示すものとの確証は得られませんでしたが、これら資料が今後の調査に役立つものとなれば幸であります。

最後にご指導ご協力をいただきました上記の方々および、関係各位に心からの謝意を表して序といたします。

昭和59年3月

松本市教育委員会
教育長　　中島俊彦

例　　言

1. 本書は昭和58年10月24日から11月9日にかけて行われた、重要遺跡推定信濃国府第2次発掘調査報告書である。

2. 本調査は信濃国府確認緊急調査として国庫・県費の補助を受けて行ったものである。

3. 本発掘調査では農林水産省蚕糸試験場中部支場のご理解をいただき、昨年に引き続き同省所有の惣社第3桑園内を調査することができた。記して謝意を表する次第である。

4. 本調査には木下良国学院大学教授、山中敏史奈良国立文化財研究所主任研究官、桐原健長野県史刊行会編纂委員の三先生にご指導をいただいた。記して謝意を表する。

5. 本書の執筆は各調査員が分担して行ったが、部分的には第1次報告書の再掲部分もある。また内容については指導者・調査員で検討し合う時間がとれなかったため、執筆者の判断によって記した。なお文責は文末に記した。

6. 本書の編集は事務局が行ったが神沢が主体となり、滝沢智恵子の助力を得た。

7. 遺物の整理は柴田尚子、松原方子、上平道子氏が当り、実測、トレースは専ら神沢が行ったが、伊那史彦氏の助力も得た。他に原稿・表・図の整理には倉科由加理、柴田尚子、吉田浩明氏の助力を得た。なお古瓦については横田作重氏が撮影、拓本を担当し、トレースは三村竜一氏が行った。

8. 遺物の写真撮影は林宰男氏が行った。

9. 出土遺物及び図類は松本市教育委員会に保管してある。

目　　次

序
例言
目次
第１章　発掘調査に至る経過
　第１節　第１次調査の概要と調査に至る経過 …… 5
　第２節　調査体制 …… 6
　第３節　調査日誌 …… 7
第２章　遺跡の環境
　第１節　遺跡の自然環境 …… 11
　第２節　周辺遺跡 …… 11
第３章　発掘調査
　第１節　調査の概要 …… 14
　第２節　遺構と遺物 …… 17
　　１．住居址 …… 17
　　２．溝状遺構 …… 20
　　３．礫群 …… 26
　　４．ピット群 …… 26
第４章　分布調査
　第１節　惣社地区 …… 27
　第２節　大村地区 …… 28
　第３節　古瓦の分布について …… 42
結び …… 49

挿　図　目　次

第１図　発掘及び分布調査位置 …………… 4
第２図　周辺遺跡 ………………………… 13
第３図　発掘調査区 ……………………… 14
第４図　遺構全体図 ……………………… 15
第５図　第１号住居址 …………………… 18
第６図　第２号住居址 …………………… 19
第７図　溝状遺構 ………………………… 21
第８図　第１・２号住居址出土遺物 …… 23
第９図　溝状遺構出土遺物 ……………… 24
第10図　第２号住・礫群・検出面出土遺物　25
第11図　検出面出土遺物 ………………… 26
第12図　分布調査（惣社地区）…………… 29
第13図　分布調査（大村地区）…………… 30
第14図　分布調査採集遺物　(1) ………… 31
第15図　分布調査採集遺物　(2) ………… 32
第16図　分布調査採集遺物　(3) ………… 33
第17図　分布調査採集遺物　(4) ………… 34
第18図　分布調査採集遺物　(5) ………… 35
第19図　分布調査採集遺物　(6) ………… 36
第20図　分布調査採集遺物　(7) ………… 37
第21図　分布調査採集遺物　(8) ………… 38
第22図　分布調査採集遺物　(9) ………… 39
第23図　分布調査採集遺物　(10) ………… 40
第24図　分布調査採集遺物　(11) ………… 41
第25図　古瓦 ……………………………… 48

表　目　次

1　発掘出土遺物集計表 ……………………………………… 51
2　分布調査採集遺物集計表 ………………………………… 52
3　土器観察表 ………………………………………………… 57
4　石器一覧表 ………………………………………………… 64
5　鉄器一覧表 ………………………………………………… 64

図 版 目 次

図版 1　桑園近景　発掘状況 …… 65
2　発掘状況 …… 66
3　発掘状況　現地指導 …… 67
4　現地指導　第1号住居址 …… 68
5　第2号住居址　遺物出土状況 …… 69
6　溝状遺構 …… 70
7　ピット群、礫群 …… 71
8　礫群　掘り上げ全景(1) …… 72
9　掘り上げ全景(2)、埋め戻し作業、調査参加者 …… 73
10　分布調査地(1) …… 74
11　分布調査地(2) …… 75
12　分布調査地(3)、発掘地点よりみた惣社（伊和神社） …… 76
13　出土遺物(1) …… 77
14　出土遺物(2) …… 78
15　出土遺物(3) …… 79
16　表採遺物(1) …… 80
17　表採遺物(2) …… 81
18　表採遺物(3) …… 82
19　表採遺物(4) …… 83
20　表採遺物(5) …… 84
21　表採遺物(6) …… 85
22　瓦、木鼻 …… 86

第1図　発掘及び分布調査位置図

第1章　発掘調査に至る経過

第　1　節　　第1次調査の概要と調査に至る経過

第1次調査は信濃国府推定地の一つで惣社（伊和神社）西側の農林水産省蚕糸試験場第三桑園内を中心とした発掘調査と、発掘地点の東側および北側1kmあまりの範囲を表面採集した。その結果は発掘調査では4軒の平安時代の住居址と、土壙が5ヶ、礫群と溝などが検出されたが出土遺物は土師器、須恵器の坏、甕、四耳壺などで、これが国府に関わるものかどうかの判断となる資料は得られなかった。一方表面採集では東地区の里山辺では広範囲にわたって土師器、須恵器が主として採集され、また北地区の本郷大村でも土師器、須恵器が多数表採された。国府が松本にあった時代は平安・鎌倉時代というので、これら遺物は同時期にありその点何らかの繋がりを感じさせ、今後の調査に資料を提供した。

第1次調査の折にも他県の国府調査の例もあって、少なくても5年計画ぐらいの長期にわたっての調査を覚悟しなければ到底解明できるものではないとの話があり、本年はその第2次調査として国の補助事業にとりあげていただいた。総事業費は200万円でうち補助率は国が50%、県が15%、残り35%が市負担である。

本年度の調査も第1次調査と同じく農林水産省蚕糸試験場中部支場第3桑園内を発掘調査させていただくべく10月11日（火）に同支場へお願いに行く。その結果、現在桑の移植のため空いている北西側畑を発掘調査してもよい旨の快諾を得る。

本年度は調査体制の充実という点で、特に指導者として後述の三先生にご指導をいただくべくお願いした。また調査は発掘調査と表面採集の二本立てで行うこととし、特に表面採集は惣社地区内をくまなく調査することとした。

各種届出、通知は昭和59年2月末日までは下記のとおりである。

58年1月8日　昭和58年度文化財関係補助事業計画書提出

4月13日　昭和58年度文化財関係国庫補助事業の内定通知

5月31日　同補助金交付申請書提出

9月3日　昭和58年度文化財保護事業県費補助金の内示
9月20日　同補助金交付申請書提出
10月12日　推定信濃国府跡発掘調査についての通知を提出
11月11日　埋蔵文化財収得届・同保管証提出
12月1日　文化財関係国庫補助金の額の確定通知
12月19日　埋蔵物の文化財認定について通知
59年1月26日　文化財関係補助事業にかかわる状況報告について提出

第2節　調査体制

指導者	木下　良	国学院大学教授	
	山中　敏史	奈良国立文化財研究所主任研究官	
	桐原　健	県教育委員会専門主事（県史刊行会）	
調査団長	中島　俊彦	教育長	
調査担当者	神沢昌二郎	社会教育課文化係長、日本考古学協会員	
調査員	山田　瑞穂	三郷小学校教諭	〃
	西沢　寿晃	信大医学部職員	〃
	三村　肇	会社員	長野県考古学会員
	山越　正義	生坂中学校教諭	〃
	横田　作重	会社員	〃
	降旗　俊行	松本保険事務所職員	〃
	森　義直	大町高校教諭	
事務局	田堂　明	社会教育課長	
	神沢昌二郎	〃　文化係長	
	百瀬　清	〃　〃　主事	
	熊谷　康治	〃　〃　〃	
	直井　雅尚	〃　〃　事務員	
	高桑　俊雄	〃　〃　嘱託	
協力者	惣社1丁目町会長	田中長治	
	惣社2丁目町会長	笹平精一	
	惣社3丁目町会長	西村清治	
	惣社公民館長	原　義男	

前田良平、丸山とりみ、中村リュ江、神田林虎衛、神田林とめ、堀江摂子、市川悦子、松原方子、橋詰阿さ子、上平道子、渡会利子、清水真理、早川鈴子、三村竜一、山田真一、三村泉

あがた考古会　　瀬川長広、大出六郎、三沢元太郎、柴田尚子

なお整理作業は進行中であるので１月以降の協力者の名前を省略した。

第３節　調査日誌

58.10.21（金）　　調査打合会議、あがたの森にて

出席者　森、三村　西沢、横田、山田、熊谷、神沢、直井

10.24（月）　晴　バックホーによる表土はぎ、午後、資材運搬、テント設営

参加者　三村、横田、瀬川、熊谷

10.25（火）　晴　検出作業開始　住居址、溝等検出　テレビ松本、朝日新聞より取材

参加者　前田、丸山、中村、清水、神田林（ト）、神田林（と）、瀬川、堀江、市川、松原、三沢、橋詰、上平、渡会

10.26（水）　晴のち曇り風強し　１住掘下げ　A～Eグリットを設定し掘下げ、Cグリット中心に方形の落込みあり。市民タイムズ、中日新聞より取材

参加者　三村、横田、前田、丸山、中村、清水、神田林（ト）、堀江、瀬川、市川、松原、橋詰、三沢、上平、渡会

10.27（木）　曇り　溝の南側検出作業　径15～60cm大のピット17ヶ検出、1住掘下げ継続　C、Dグリット内の方形の落ち込み確認

参加者　前田、丸山、清水、神田林（ト）、市川、松原、三沢、橋詰、瀬川、上平、中村

10.28（金）　晴　１住ベルトを残して掘り上げる。南側礫群あらい出し。２住掘り下げ開始。溝１、３の掘り下げ開始、遺方測量の基準クギ設定

参加者　前田、中村、上平、渡会、大出、神田林（ト）、神田林（と）、清水、三沢、市川、松原、橋詰、瀬川、三村（り）

10.29（土）　晴　１住と２住の周辺検出。２住内の礫と２住西側に続く礫洗い出し。溝１、３掘り下げ継続。溝２、４掘り下げ開始　南側礫群の実測

参加者　中村、神田林（ト）、神田林（と）、渡会、瀬川、市川、松原、橋詰、上平、清水、三沢、大出、三村（り）

10.30（日）　晴　南側礫群の南３ヶ所を掘り石の列び確認、実測も継続、１住、２住周辺の小礫洗い出し、１住精査、礫の確認、落ち込み半割、溝掘り下げ継続。

参加者　三村、横田、丸山、中村、神田林（と)、市川、松原、橋詰、清水、瀬川、三沢、大出、三村（り)、上平

10.31（月）　晴　南側礫群の3ヶ所のグリットの実測。ピット掘り。他に1住礫掘り出し。2住内サブトレンチ掘る。

参加者　丸山、中村、神田林（ト)、神田林（と)、堀江、市川、松原、橋詰、渡会、瀬川、清水、三沢、大出、三村（り)、山田、上平

11.1（火）　晴　上下の山を削り溝の続きを確認。南東隅の溝掘り下げ、溝の実測。1住ベルトセクション実測。1住ベルト外し。

参加者　清水、瀬川、大出、三村（り）

11.2（水）　晴　溝内の礫実測完了。1住内ピット半割しセクション実測。2住ベルトセクション実測。2住内礫たち切り、地区内北半分実測。

参加者　清水、三沢、瀬川、大出、三村（り)、山田

11.3（木）　晴　溝のベルトセクション実測。地区内北半分実測継続。レベル読み。1住内ピット掘り上げ。2住ベルト外し精査

参加者　三村、森、三村（り)、清水、瀬川、山田

11.4（金）　曇　2住精査、溝のベルト外し、1住写真撮影、溝内、1住、ピット1の遺物取り上げ、午後桐原、木下、山中諸先生現地視察、夕方5：30より本庁東会議室にて三先生を囲んで検討会を行う。

参加者　三村、森、横田、三沢、瀬川、大出

11.5（土）　曇　写真撮影、溝、1住、2住、南礫群、ピット群、全体撮影、溝内の礫を取り除き掘り上げ、溝の続きを確認、全体清掃。山中先生、森、神沢、熊谷で遺跡周辺調査

参加者　森、三沢、瀬川

11.7（月）　曇のち晴　南側の溝と礫群を切ってみる。礫の埋め戻し、1住、2住のセクション及びピット実測。他方遺物整理をあがたの森で開始

参加者　横田、大出、柴田

11.8（火）　晴　溝の東側確認作業。セクション実測。10時より重機にて埋め戻し作業。1住、2住、ピット群写真撮影。市民タイムズ取材

11.9（水）　曇　手作業による埋め戻し。資材撤収し、島立へ運搬、土器整理行う

参加者　大出、三沢、瀬川、柴田

11.10（木）　曇のち小雨　土器洗い

参加者　柴田

11.11（金）　晴　土器洗い

参加者　柴田

11.12（土）　曇のち雨　土器洗い

参加者　柴田

11.18（金）　小雨のち晴　分布調査、惣社南側を中心にまわる。昼食は惣社公民館を借りる。

参加者　三村、西沢、横田、瀬川、大出、三沢、前田

11.27（日）　快晴　分布調査、惣社周辺の表面採集及び聞き取り調査、午後は湯川左岸を調査

参加者　西沢、三村、瀬川、大出、三沢、横田、早川

11.29（火）　快晴　分布調査、惣社地区北側周辺表面採集及び聞き取り調査

参加者　西沢、三村、横田、瀬川、三沢、大出、早川、前田

12.4（日）　晴　分布調査、惣社地区西及び西南部表面採集及び聞き取り調査

参加者　西沢、三村肇、三沢、横田、瀬川、大出、前田、早川、三村いずみ

12.6（火）　晴　分布調査、惣社周辺の総括と聞き取り調査

参加者　三村、前田、神田林、瀬川、大出、三沢

12.30（金）　晴　遺物一覧表づくり

59.1.3（火）　晴のち曇　土器実測

1.9（月）　晴　古瓦調査、土器実測、土器註記

1.10（火）　晴　土器実測、土器註記

1.11（水）　雪　土器実測、土器註記

1.15（日）　曇　土器実測、古瓦調査

1.16（月）　晴時々曇　土器実測

1.17（火）　晴　石器実測、土器註記

1.18（水）　晴　石器実測

1.19（木）　雪　土器・石器トレース

1.21（土）　晴のち曇　土器・石器トレース

1.22（日）　雪　古瓦調査

1.23（月）　晴一時曇　土器・石器トレース

1.24（火）　晴　古瓦調査、土器・石器トレース

1.25（水）　晴　図プレートはり、一覧表づくり

1.26（木）　雪　図プレートはり、一覧表づくり

1.27（金）　晴時々曇　一覧表づくり、図プレートはり

1.28（土）　雪　図プレートはり

1.31（火）　大雪　土器実測

2.1（水） 晴 土器実測
2.2（木） 晴のち曇 石器実測
2.3（金） 雪 石器実測トレース 表づくり
2.4（土） 晴 地図トレース 表づくり
2.5（日） 曇 図プレートはり 表づくり 古瓦調査
2.6（月） 雪 図プレートはり 遺構トレース
2.7（火） 雪 遺構トレース 表づくり
2.8（水） 雪のち曇 表づくり
2.9（木） 雪のち曇 表づくり
2.10（金） 雪のち晴 遺構図整理 スクリーントーンはり
2.11（土） 晴 分布調査図スクリーントーンはり 同一覧表づくり
2.12（日） 晴のち曇 分布調査整理
2.13（月） 曇時々雪 表 清書 分布図スクリーントーンはり
2.14（火） 晴 表 清書 遺物写真撮影
2.15（水） 晴一時曇 表づくり 清書
2.16（木） 晴 図整理
2.17（金） 雪 図整理
2.20（日） 晴 表整理
2.21（月） 曇のち晴 表整理
2.26（日） 雪 原稿作成
2.27（月） 曇 原稿作成
2.28（火） 晴 原稿作成
2.29（水） 晴 原稿作成 図版作成 割りつけ作業
以下印刷所渡し

（事務局）

第2章　遺跡の環境

第　1　節　　遺跡の自然環境

地形地質について

本遺跡は、松本市市街地の東端惣社地籍にあり、松本市東部を形成した薄川による扇状地と、女鳥羽川による扇状地との境界付近にある。

薄川は三峯山の西側を源流とし鉢伏山の東北を通り、美ヶ原付近の水を集め入山辺地区から西流し旧松本市南端を流れて田川と合流している。薄川の特徴は下流で堆積物が異常に厚いことであり松本市一帯の地盤沈下など構造上の問題にも関係すると考えられている。堆積物は流域の岩石である緑色変質火山岩、石英閃緑岩、安山岩、玢岩などの礫を主体としている。

女鳥羽川は三才山付近に源を発して西流し、本郷の稲倉で南流に転じて松本市街地の北から流入する河川で、松本市白板付近にて田川と合流する。堆積物は上流で新生界第三系の内村層とそれに貫入した玢岩を浸食して流下するため、砂岩、玢岩などの礫が多い。

薄川、女鳥羽川両河川により形成された扇状地について

薄川により形成された扇状地は、扇頂を入山辺地区南方付近とし、南は和泉川付近、北は清水付近の湯川を境として女鳥羽川の扇状地に接し、西は旧松本市の市街地に達している。本遺跡は湯川の南西200m付近にあり、薄川扇状地の最北端に位置している。

女鳥羽川により形成された扇状地は、本郷の稲倉付近を扇頂とし、本郷や岡田に広い扇状地をつくり、湯川を境として薄川の扇状地に接し松本市の北部を形成している。

なお本節は第1次調査報告と変化がないので再掲した。　（森　義直）

第　2　節　　周　辺　遺　跡

この項についても前年調査報告書を出しているが、僅かに新知見が増えたのみで変りがないので第1次の報告書の部分を再掲する。

縄文時代、山麓から平地までその遺跡の範囲は広い。薄川上流の右岸段丘上に、中・後期のおりど、おやしき遺跡があり、順次下って、上金井、矢崎、古宮（中期）、堀之内、針塚（前期）、堂前遺跡（中期）があり、薄川左岸では厩所、橘倉、林山越遺跡があり、特に林山越遺跡からは石棒2本が出土している。下って四谷遺跡からは中期後半に属する完形土器が、埋橋遺跡では凹石と石棒

が出土している。本郷地区に入ると雪中遺跡から曽利Ⅲ式併行の深鉢が水田の中より、からし畑遺跡でも曽利Ⅲ式併行の深鉢と後晩期土器の出土をみている。また県営野球場西の柳田遺跡からは中期と晩期の遺構、遺物の検出があり、女鳥羽川底の女鳥羽川遺跡で晩期の遺物が出土している。

弥生時代　弥生時代の期間が400～500年の短期間のためもあってか、遺跡数は少ない。薄川右岸の古宮遺跡の僅か東に鎌田遺跡（後期）があり、やや下って段丘南辺に針塚遺跡がある。ここからは条痕文の壺が既出しているが、57年3月の調査で再葬墓とわかり、その埋納された壺の中には遠賀川系と思われるものが含まれている。下ってあがた遺跡からは中期後半以降の百瀬式の甕や石器製造址と思える遺構などが検出されている。平地に入って元町七本松周辺の元屋敷遺跡からも、中期後半から後期にかけての出土がある。また、今回調査範囲内の宮北遺跡からも後期の壺が検出されている。薄川左岸では松本工業高校遺跡、筑摩遺跡からも破片の出土をみている。

古墳時代　山辺地区には山麓と平地にかけて18基の古墳があり、本郷地区でも24基がある。山辺地区の古墳の中には6基の積石塚古墳があり、本郷地区には9基の積石塚古墳がある(1)。

奈良・平安時代　この時期になると遺跡数が増え、平地では現在の集落とほとんど重なっており又縄文時代の遺跡と重なるものも多い。薄川右岸上流からみると、おりど、おやしき、上金井、矢崎、鎌田、古宮、堀之内、兎川寺、新井、荒町、下原、左岸では厩所、橋倉遺跡があり、更に西に下ると松本工業高校、富士電機工場、神田、筑摩遺跡等があり、薄川右岸に戻るとあがた、松商学園、県ヶ丘高校、西小松、蚕糸公園遺跡など全面に広がっている。いずれも土師器、灰釉陶器等が出土している。特にあがた遺跡では緑釉段皿が既出しており、54年の発掘調査では前記弥生時代の竪穴住居址のほか、平安の住居址が1軒検出され、その床面からは金メッキされた釵子が出土している(2)。松商学園からは八稜鏡が出土している(3)。

昨年の第1次調査の表面採集の結果、里山辺新井、下原遺跡の範囲が適確となり、またその中心部分が下原遺跡では山辺中学校南側の住宅地、新井遺跡は里山辺消防署南東300mあまりの地点である(4)。

（神沢 昌二郎）

参考文献　(1)(3)「長野県史考古史料編遺跡地名表」長野県教委　昭和57年

(2)「あがた遺跡」　松本市教委　昭和56年3月

(4)「推定信濃国府」第1次　松本市教委　1983.3

◎発掘地点
1.おりど・おやしき遺跡
2.上金井遺跡
3.鎌田遺跡
4.矢崎遺跡
5.堀の内遺跡
6.兎川寺遺跡
7.針塚遺跡
8.荒町遺跡
9.下原遺跡
10.新井遺跡
11.惣社北遺跡
12.横田遺跡
13.大村遺跡群
14.元屋敷遺跡
15.女鳥羽川遺跡
16.清水遺跡
17.西小松遺跡
18.県ケ丘高校遺跡
19.蚕糸公園遺跡
20.松商学園遺跡
21.松本工業高校遺跡
22.富士電機遺跡
23.神田遺跡
24.筑摩東遺跡
25.三才遺跡
26.筑摩遺跡

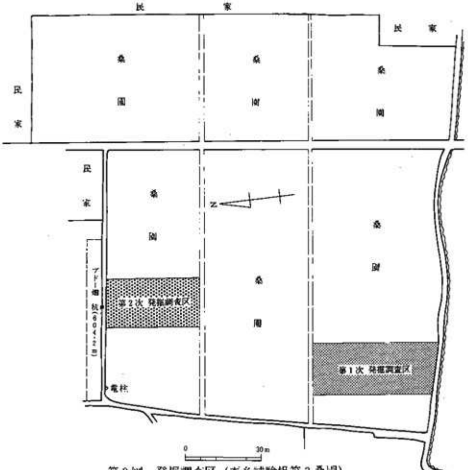
第2図　周辺遺跡

第3章　発　掘　調　査

第　1　節　　調査の概要

今回の発掘調査は第3図のごとく、57年度調査箇所の約50m北側の僅かに東寄りに位置し、東西20m、南北約40mの桑園を調査したが、遺構としては平安時代後半の竪穴住居址2軒と、完掘はできなかったが、巾1.5mあまりのコの字状に曲る溝および小ピット20本である。その他、南側部分では前年度調査で検出されたと同様の一面に礫の続く部分が検出された。これら遺構は全面的に浅く地表下30~40cmあまりで、耕作により壁面などは既に削平されていた。

出土遺物も少量であり別表で示すように350片あまりしかなく、総重量でも、2.7kgでしかない。主なものは第1号住居址の床面より出土した完形の土師器坏一点程度で、他には特記する程のものがない。



第3図　発掘調査区（蚕糸試験場第3桑園）

第　2　節　　　遺構と遺物

1　住居址

(1)　第1号住居址（第5図・第8図）

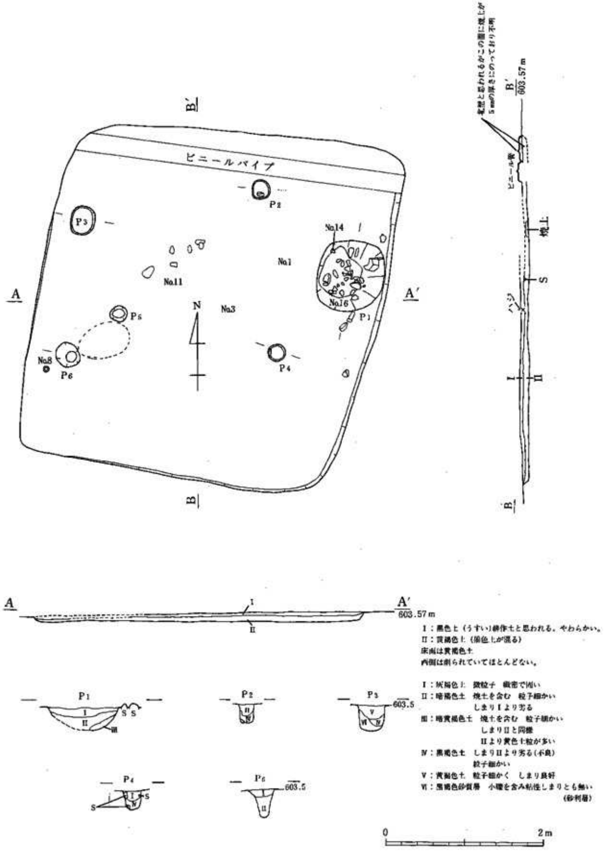
発掘調査区のほぼ中央で検出され、その北側2ｍ余りに第2号住居址が検出されている。プランはほぼ正方形であるが菱形に変形している。大きさは東西4.3ｍ×南北4.4ｍで、主軸はほぼN−78°−Eを指す。壁は北側が攪乱により不確定である。地形がやや西に傾くために、壁高は西側が5cm、東側は10cmあまりしか残っておらず、傾斜も僅かである。床面ははっきりしており、ほとんど水平である。しかし北側には東西にパイプが配管されており攪乱のため不明である。柱穴と思われるものはP2（22×26、−34cm）P3（30×36、−40cm）P4（22×23、−27cm）P7（31×31、−34cm）の4本であり、その土層は図示したごとく、灰褐色土と暗褐色土の変化の少ないものである。カマドは検出されなかったが西寄りのP7に接して、東西70×南北50cmあまりの焼土の範囲があり、耕作による攪乱で確認はできなかったが、焼土の西側住居址外にも焼土が飛んでいたので煙道が西に続いていたのかも知れない。またP1（84×90、−27cm）には最大20cmから拳大の礫が入っており焼土が混入していた。

遺物は床面で土師器、灰釉陶器、中世陶器片など小破片があったにすぎず、時期の特定の決め手になるものも少ないが、土師器片などより平安時代末期に位置するものとみたい。

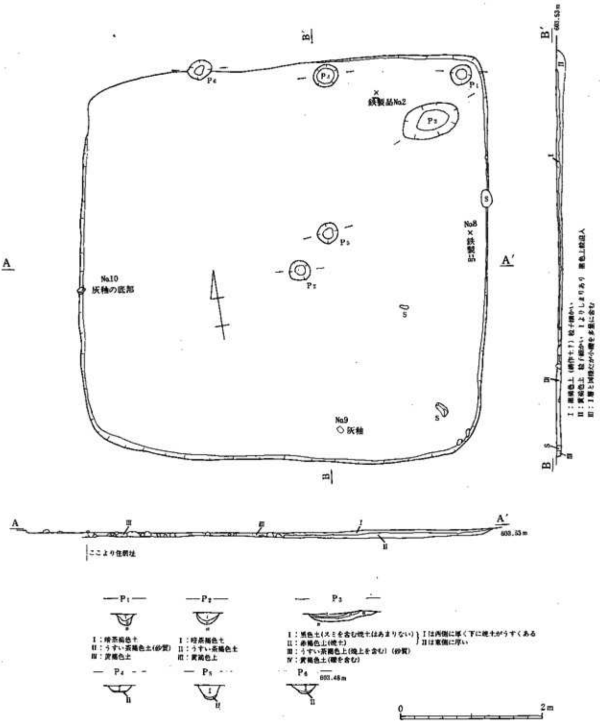
(2)　第2号住居址（第6図）

発掘地点のやや北寄りにあり第1号住居址と並んでいる。主軸はN−79°−Eでプランは方形で大きさは東西5.6×南北5.8ｍであるが、住居址の西側半分は自然堆積による礫層があらわれてはっきりしにくい部分もある。残存する壁高は5cmあまりで、壁の傾斜は不明である。床面は東半分がはっきりしており、堅いが、東壁に接する部分でも粗い小礫層があり、起伏する礫層の上部に住居址がつくられたものと思われる。西側の礫層をたち切ったが、礫は15cm大のものもあり深く続いているようである。その範囲は第2号住居址の西側一帯に広がっている。柱穴はP1（32×28、−16cm）P2（32×28、−12cm）P4（36×32、−11cm）をみたいが、西側については不明である。カマドははっきりしないが東北隅のP3（80×48、−9cm）上部には焼土の範囲が東西に長く広がり、壁外の東側にも径約30cmの焼土部分があったのでこれが煙出ではないかと思われる。

遺物は土師器破片、灰釉陶器、鉄製品などであるが、住居址外東側からは石鏃1点も検出されている。出土量は総じて少ない。本址の時期については土師器片などからして、平安時代末期とみたい。


B′
ビニールパイプ
P2
P3
No.14
No.1
No.11
A
A′
N
No.3
P5
No.16
P1
No.8
P6
P4
B
B′
603.57 m
ビニール管
焼土
S
ハシゴ
I
II
B
A
A′
603.57 m
I
II
I：黒色土（うすい）耕作土と思われる。やわらかい。
II：黄褐色土（黒色土が混る）
床面は黄褐色土
西側は削られていてほとんどない。
P1
P2
P3
603.5
P4
P6
603.5
I：灰褐色土　微粒子　緻密で固い
II：暗褐色土　焼土を含む　粒子細かい
しまりIより劣る
III：暗黄褐色土　焼土を含む　粒子細かい
しまりIIと同様
IIより黄色土粒が多い
IV：黒褐色土　しまりIIより劣る（不良）
粒子細かい
V：黄褐色土　粒子細かく　しまり良好
VI：黒褐色砂質層　小礫を含み粘性しまりとも無い
（砂利層）
0
2 m

第5図　第1号住居址


A
A′
B
B′
P1
P2
P3
P4
P5
鉄製品No.2
No.8
鉄製品
No.10
灰釉の底部
No.9
灰釉
S
ここより住居址
603.53m
603.48m
Ⅰ：暗茶褐色土
Ⅱ：うすい茶褐色土(砂質)
Ⅲ：黄褐色土
Ⅰ：暗茶褐色土
Ⅱ：うすい茶褐色土
Ⅲ：黄褐色土
Ⅱ：赤褐色土(焼土)
Ⅳ：黄褐色土(礫を含む)
Ⅱは東側に厚い
0
2m

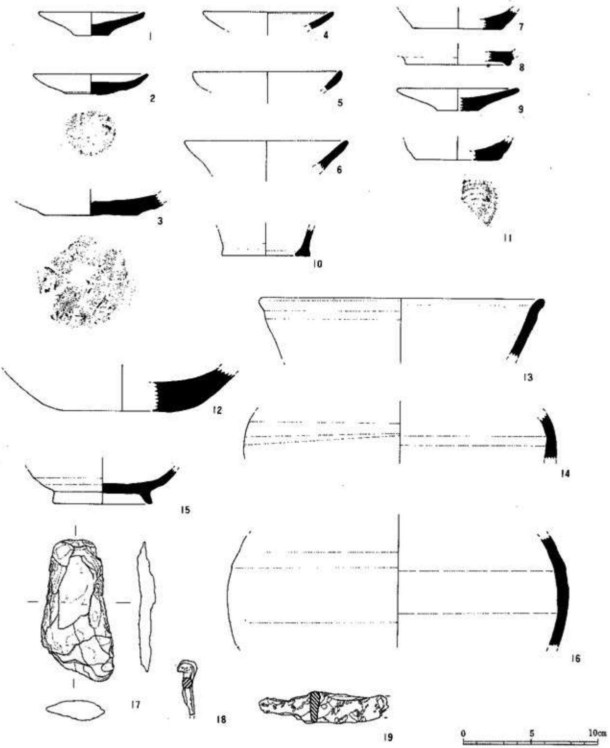
第6図　第2号 住居址

2　溝状遺構（第7図）

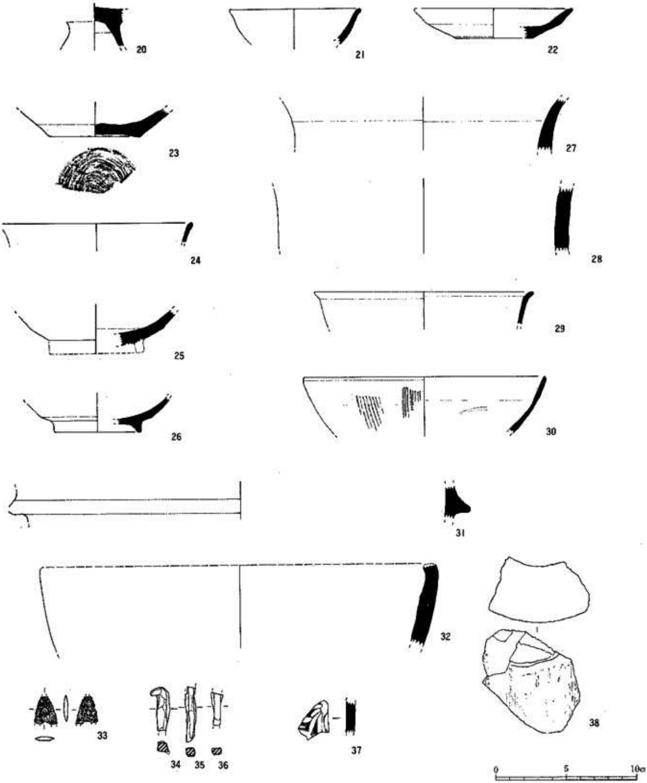
発掘調査区南寄りに東西に巾1.5mあまりの溝状遺構があらわれ、その範囲を追求したところ、溝状遺構は西側でほぼ直角に折れ曲り、南走して更に東へ〝コ〟の字状に続いていることが判明した。西側は排土、東側は農地のため完掘はできなかったが、その規模は北側が東西12m、西側も12mあまり、南側は東端の確認ができないが、検出部分までは12mあまりである。南側の溝については礫群の中のわずかな土色の差異をもって判別したが、他は農道にかかるため部分的にしか掘れなかった。溝状の主軸はW－4°－Nで、溝内には最大40cm、最小10cm大の礫があたかも投げこまれたように無作為に入っており、その中でも割れた角のある石が目立った。礫は溝の底にはついていず溝廃絶後ある程度の時間差があってから、溝が埋められたと思われる。礫の取り上げ後の形は底の平らなU字形の溝で、東端が高く西へは30cmあまりの勾配がついている。深さは検出面より約50cmである。溝の東端は溝底を掘りくぼめて石を捨てた状態に受けとれる。溝の下部は約10cmの厚さに黄褐色土に砂利混りの層があり、その下は小礫混りの砂利層となっている。

溝内の出土遺物は土師器の小破片が多く、他に灰釉陶器、中世陶器、フイゴの口などが出ておりその出土層は下部の黒褐色土層が最下層で、多くは礫と共に出土している。注目することは第8図24に示した緑釉陶器の小破片の出土したことである。

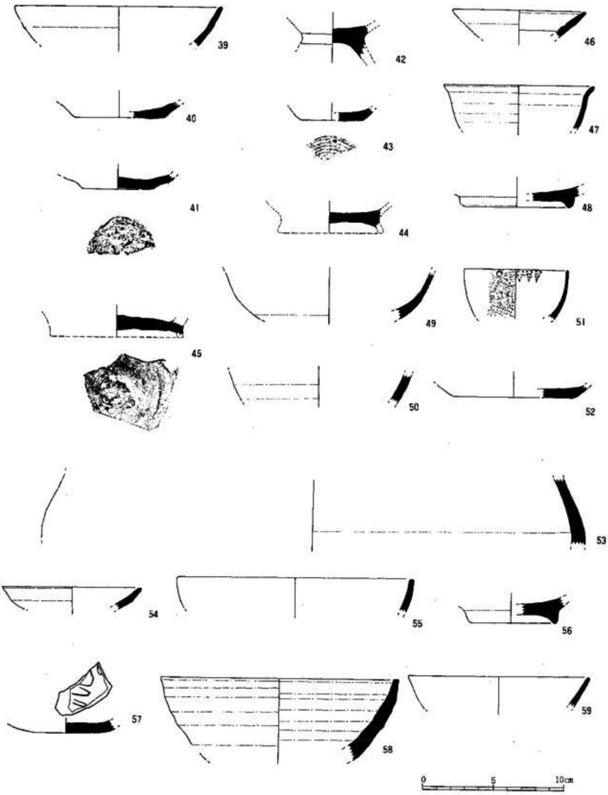
しかしこの溝が果して何なのか、何故〝コ〟の字状になっているのか、また時期的には何時作られたものかはっきりしない。西側の勾配の一番低い位置に更に溝が続いていれば水はけのためとも言えるが、これも推測の段階を出ない。又、溝内の遺物についてみると、時期的に一番新しいものは泥メンコで江戸時代。一番古いものは緑釉陶器で下っても平安時代と時期差が大きく、一番遺物の多い土師器の時期を溝の廃絶した時期とみて、平安末期として考えたい。



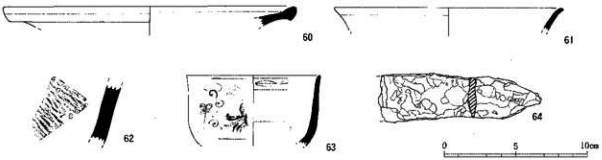
第８図　第１・２号住居址出土遺物



第9図　溝状遺構出土遺物



第10図　２号住礫群・検出面出土遺物



第11図　検出面出土遺物

3　礫群　（第7図）

今回発掘地点の南側部分にW—30°—Nの線で最大60×30cm、平均的には10～20cm大の礫がほとんど平らに広がっており、その状態は57年度発掘調査で検出された礫群と類似している。ただこれも北側の端部をみているのみで、全貌をうかがうことはできないが、南側の3ヶ所のトレンチではいずれも礫が続いており、この範囲が広いことを推測させる。しかし東部トレンチでは礫がまばらになっており、このあたりの線が東側の限界かとも思われる。

この礫群が人為的なものか自然のものかについてははっきりしないが、大礫一箇だけについては少しばかりの洪水では動きそうもないので人為的に置かれたものではないかと思われる。この礫の下には僅かにシルト層があり、その下は砂利層となる。他の礫群の下も礫混りの砂利層があり、これが所々に地表面に顔を出しているものと思われる。

伴出遺物は礫群に関わるものではなく、その覆土および検出面より灰釉陶器、中・近世陶器など少量が検出されているが、これらは、本発掘地点における全般的傾向である。

4　ピット群　（第7図）

溝状遺構に囲まれた中にピットが19本あり、いずれも10cmにも満たない深さであり、大は径60cm、小は径12cmで差が大きく、このピットがどのような遺構に伴うのか、またピット独自で何の遺構を示すのかわからない。

第2号住居址の北側にも4本のピットが検出されたが、この方は30cm近くの深さを保っているが4本の配列に規則性がなく、強いて言うならば西の1本を除いて3本のピットはW—40°—Nの線で一線になるが、その間隔は4.2m、3.7mと不揃であり結局のところ何の為のピットか不明である。

（神沢昌二郎）

第4章　分　布　調　査

概要

昭和57年度の分布調査は発掘地点の惣社第３桑園の東側、１kmあまりの里山辺地区と、北側２kmあまりの大村地区を中心に行ったが、本年は惣社地区内に表面採集の行える地点は落ちなく調査を行うこととして、地元の町会長に依頼して全世帯に調査の主旨と協力依頼のチラシを配布し、公図をもとに10名あまりで延４日間調査を行った。調査の仕方は表面採集と聴き取り調査で、採集遺物は一筆ごとに記録にとどめた。

また57年度に行った大村地区においても、今回の調査とは別に地元横田作重氏が平常調査された採集結果をも加えた。また、布目瓦の分布についても既報告資料をも含めて調査を行った。

第　1　節　　惣社地区（第12図，第２表）

79ヶ所にまとめて調査を行った。宅地・水田等については調査がしにくく、勢い畑地中心となったが、惣社地区内の大凡は把握できたといえよう。ただ採集遺物のうち近世以降と思われるものはつとめて割愛した。それは国府所在時期が平安・鎌倉時代であるので、古代・中世に主力をおいたためである。

これでみると全域にわたって量の多少はあれ中近世の遺物があり、土師器、須恵器、灰釉陶器は今回発掘調査をしている惣社（伊和神社）西側が圧倒的に多く採集されている。それと共に湯川と藤井沢合流点西側ブドー畑でも予期以上の破片が採集された。前者は西側に低湿地を持つ微高地であり、後者は湯川脇でありながら島状に高い地点で、それはNo.57、58も同様であり、湯川の氾濫を避け得たものと思われる。

これに対して湯川をはさんでNo.52～56の両岸は少量しか採集されない、湯川の左岸（No.53）での調査では吉田保明氏（80才、横田八反田41）より聴取ったが、58年９月28日には大雨によりNo.70から53あたりにかけて一面に水がついたという。自宅には掘井戸があり三間半程掘ってあるというが、現在水位は5.2mであった（11月３日）。なおこの井戸は薄川系の水で良質であるが、湯川右岸では女鳥羽川水系で渋水であるとのことであった。湯川右岸のNo.54～56一帯はブドー畑、市民農園、宅地となっているが東寄りには新しく住宅が建てられており、西村真一氏宅工事現場の掘削断面では０～30cm埋土、30～48cm耕作土、48～55cm溶脱層、赤褐色砂礫土層、55～80cm砂利層とシルト状砂

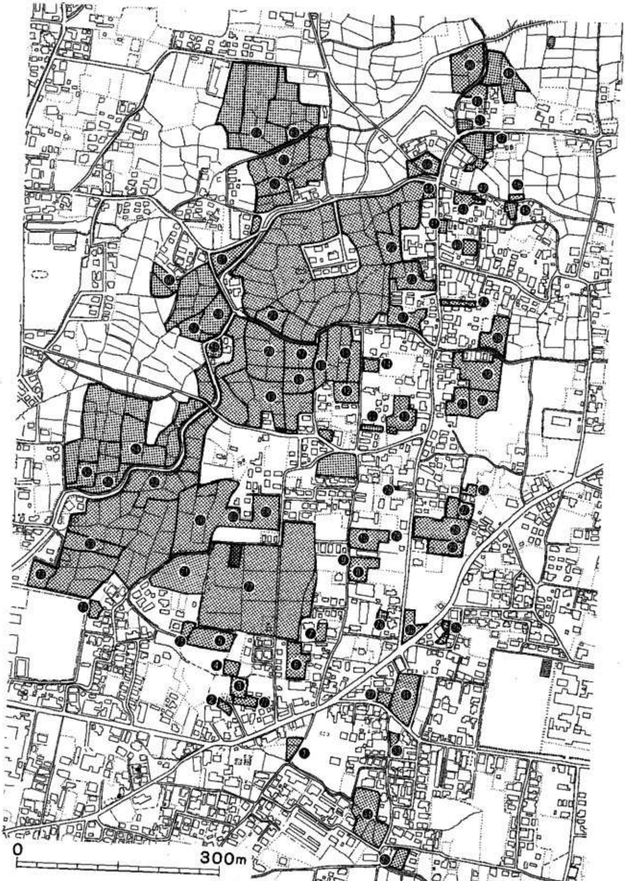
層（茶褐色）80～130cm、シルト層となっており、過去において生活面があったことを伺わせる何物もない。このあたりは小字では"下の丁"と言われているが、地形的にみれば湯川により浸水しやすい場所であったと思われる。これと同様に遺物の採集されなかったNo.15～22周辺の果樹園、水田でも、特にNo.61の対岸あたりでは今回湯川の増水により溢水している。No.79の道路では下水工事中の掘削箇所があり、ここでは地表下１ｍの茶褐色土層より土師器の小片を採集している。

これら標高601～608ｍラインに対して、610ｍ前後のラインでは集落とその東側に遺物が出土しており、伊和神社東側の南北に走る道路の両脇に当るということからすると、この道と遺物の分布との関わりがあるのではないだろうか。

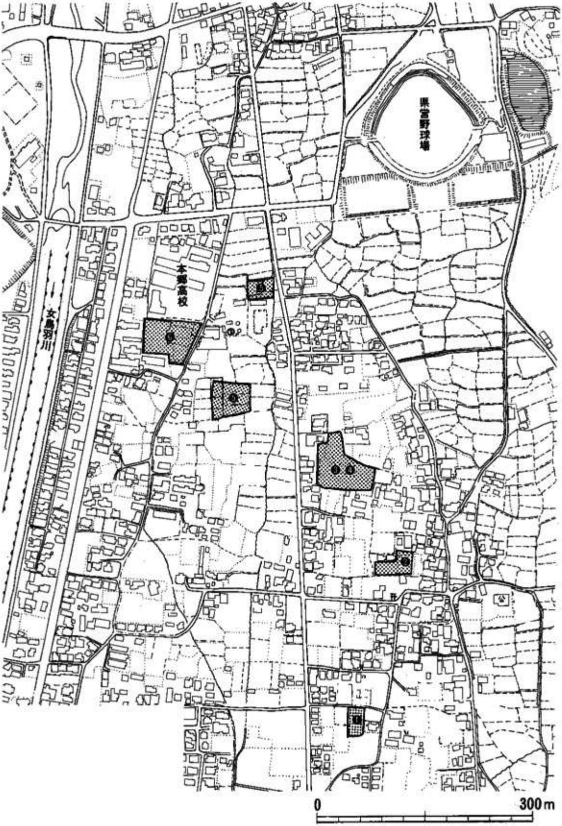
第　2　節　　大村地区　(第13図、第２表)

大村地区は57年度と全く同じ場所である。採集に歩く度に遺物が拾えるということは、それだけ本地区の遺跡が濃密であることを示すものである。まずNo.１であるが縄文土器片と須恵器片が採集されている。この周辺からは縄文中・後・晩期の遺物が出土しており、松本平でも数少ない貴重な遺跡といえる。No.２も須恵器片が多量に採集されているところであるが、今回も須恵器片を中心に土師器、中近世陶器を採集している。No.３、No.４は旧国鉄バス車庫東側で図では一つに続くものであるが、表採では地番によって分けて採集しているので表では二つに分けた。No.５は本郷高校東側の水田を中心とした地域であるが、土師、須恵器片と共に中近世陶磁器もあった。昨年度調査と合せてみると平安期が中心と思われる。No.６は本郷高校の南側畑であるが、昨年度と同様に須恵器片が多い。

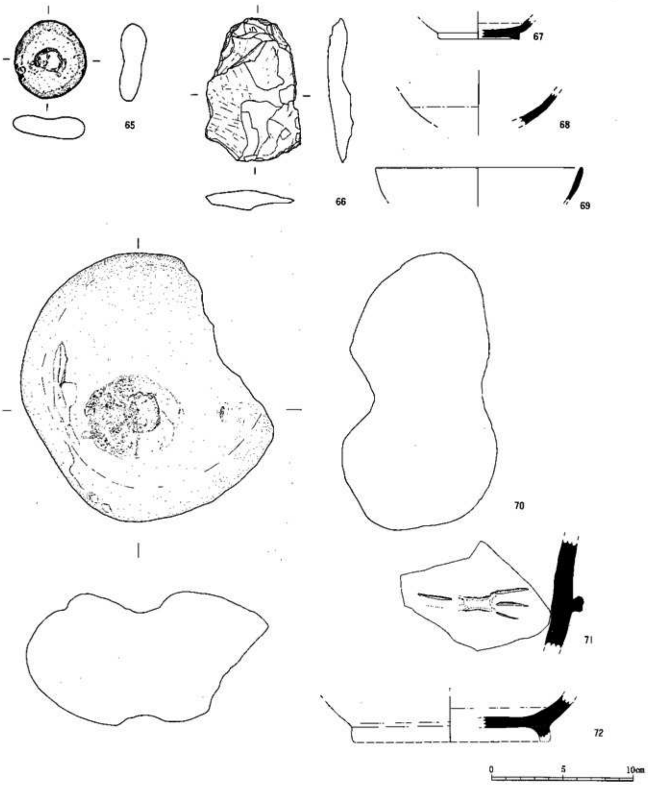
（神沢　昌二郎）



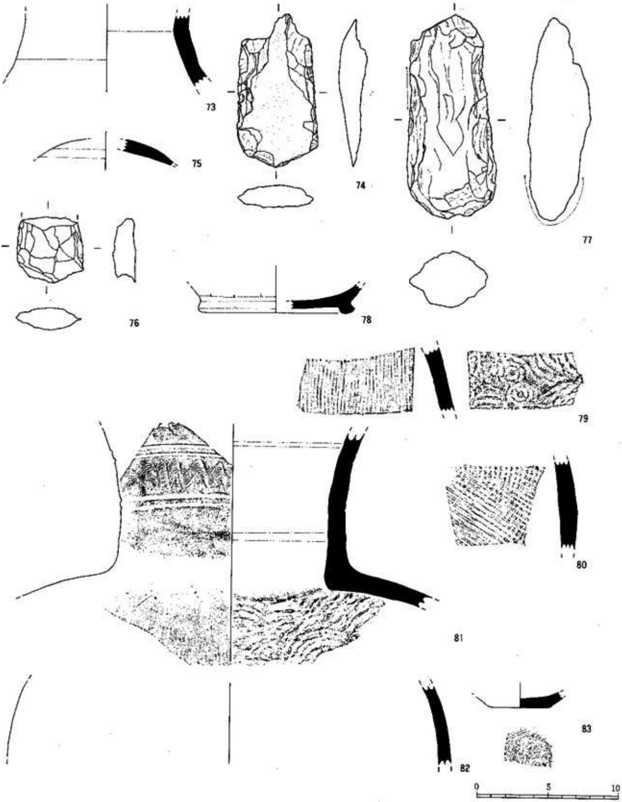
第12図　分布調査（惣社地区）



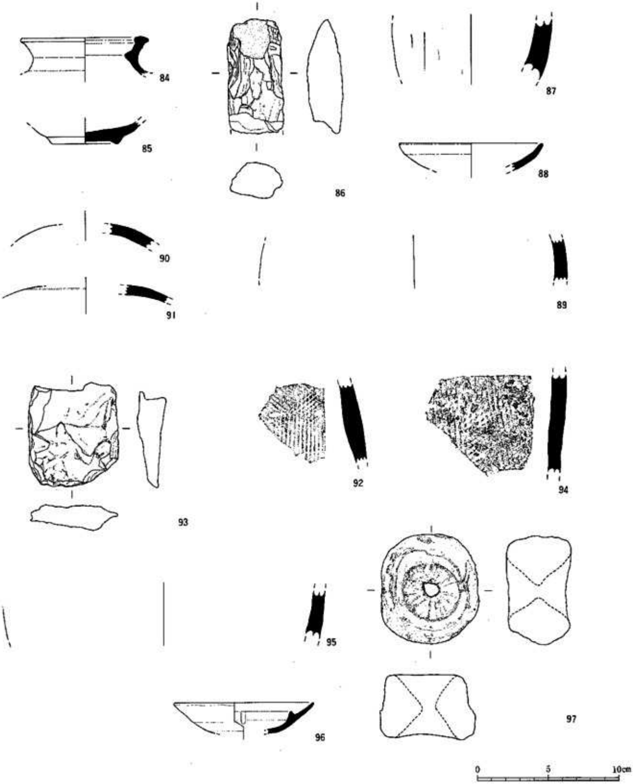
第13図　分布調査（大村地区）



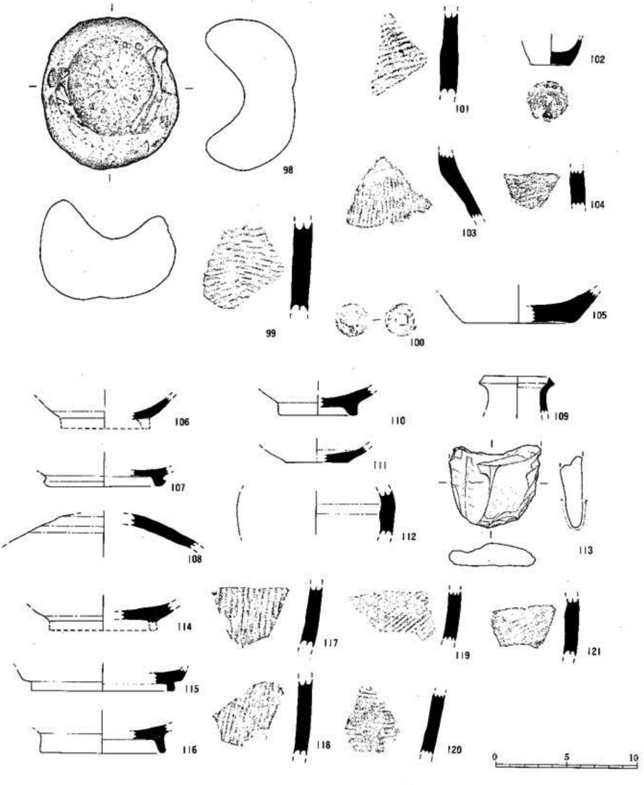
第14図　分布調査採集遺物 (1)



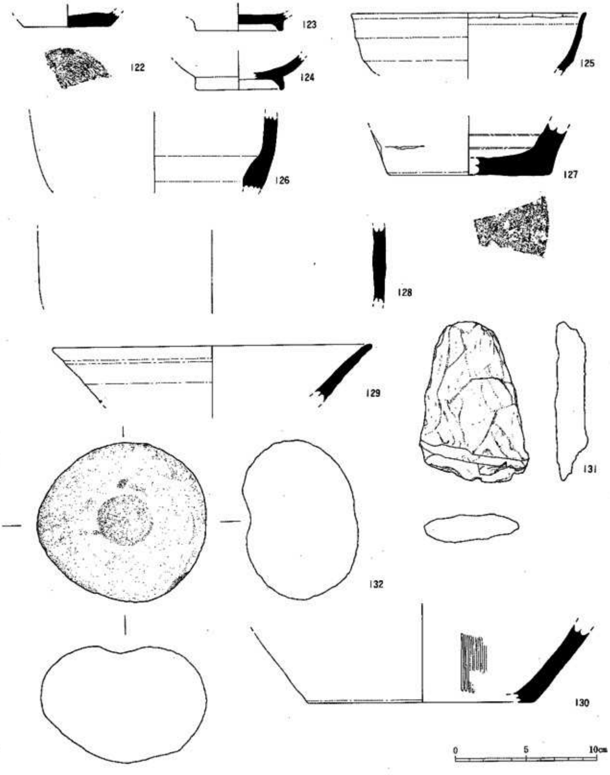
第15図　分布調査採集遺物 (2)



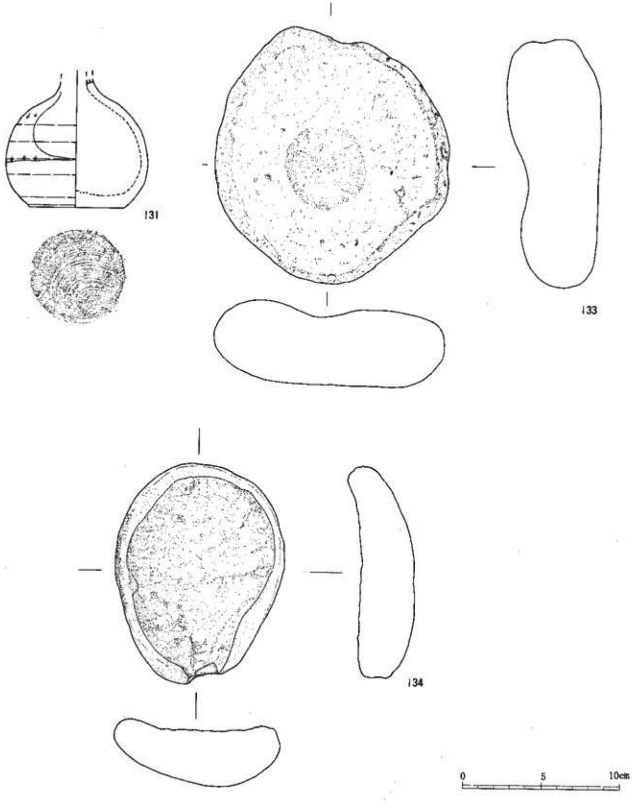
第16図　分布調査採集遺物 (3)



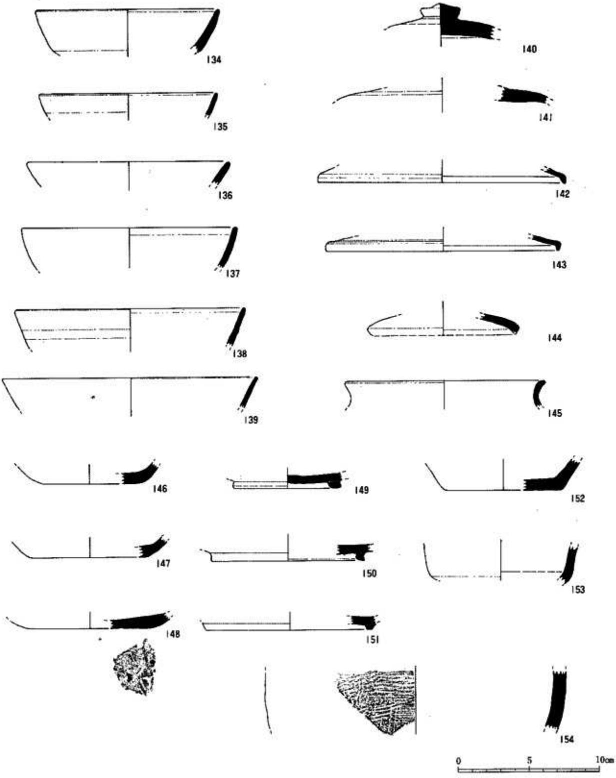
第17図　分布調査採集遺物 (4)



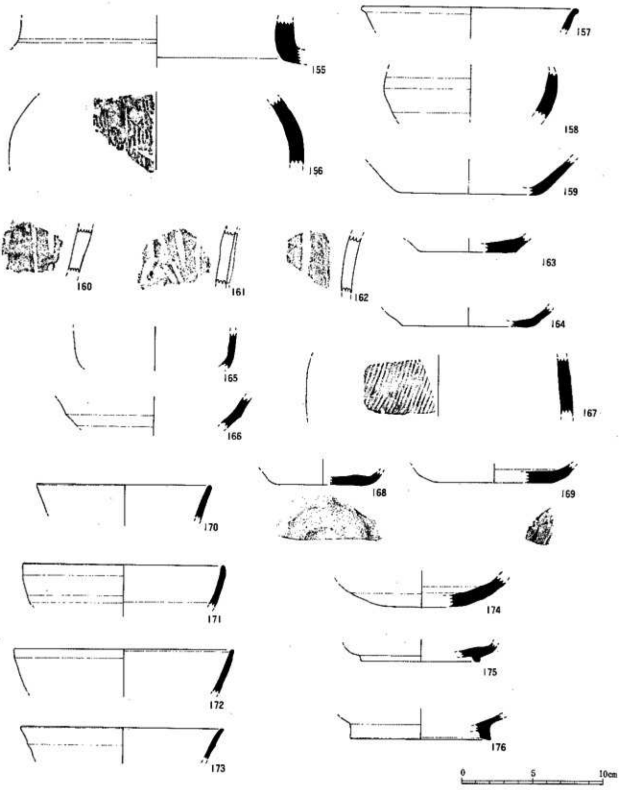
第18図　分布調査採集遺物 (5)



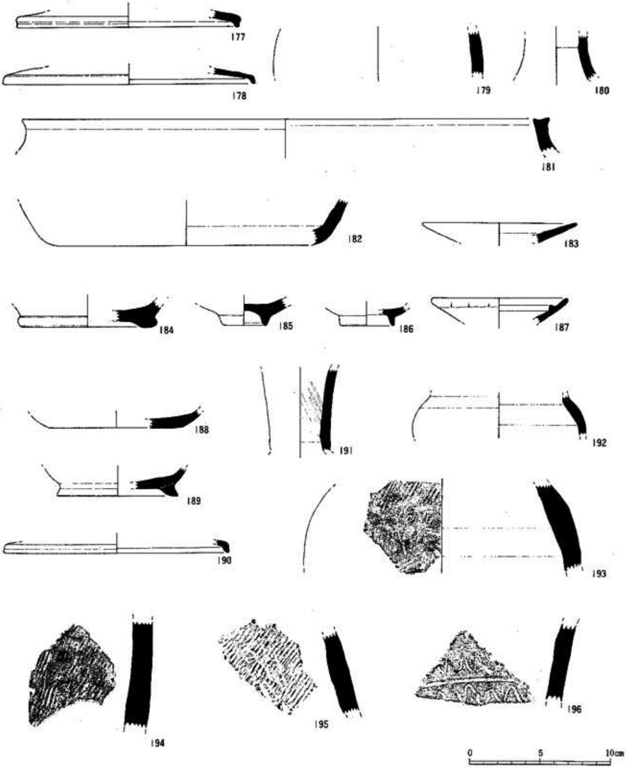
第19図　分布調査採集遺物 (6)



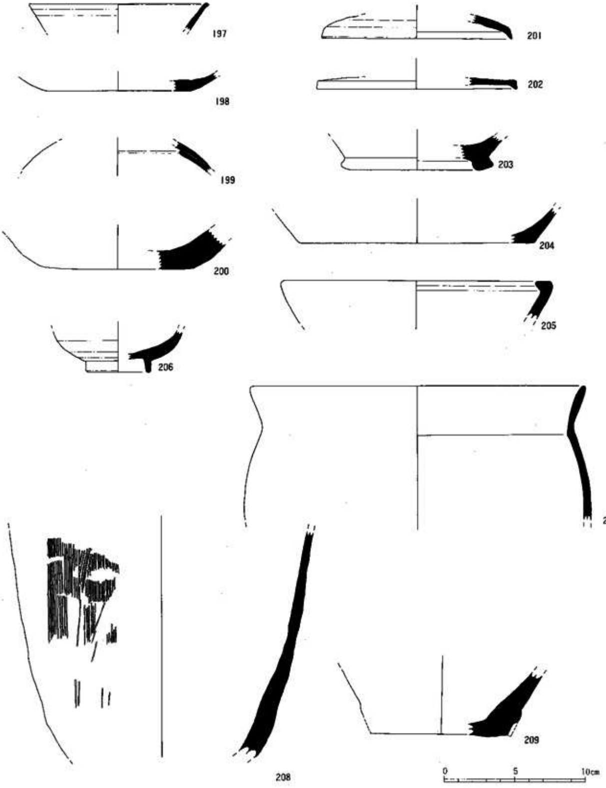
第20図　分布調査採集遺物 (7)



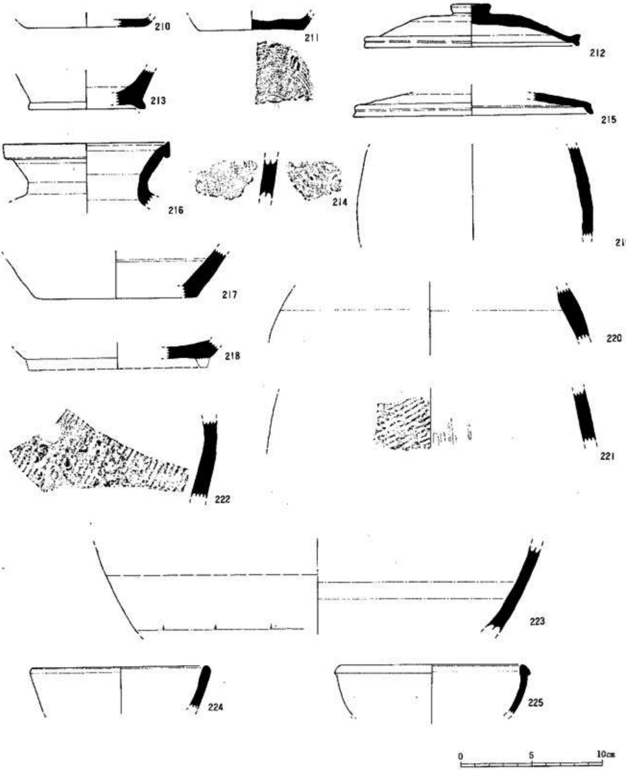
第21図　分布調査採集遺物 (8)



第22図　分布調査採集遺物 (9)



第23図　分布調査採集遺物 (10)



第24図　分布調査採集遺物 (11)

第 3 節　　古瓦の分布調査

I　はじめに

小県郡より筑摩郡への信濃国府移転の時期について、文献史・地名学上から不確実ではあるとしながら、一応延暦９年（790）前後とした第１次推定国府調査団長倉科明正氏の推定に基づき、信濃国府の位置を推理する一つの方法として、古瓦の分布調査を行う事としたが、奈良時代後期から平安時代前期にかけては、瓦葺き屋根構造に衰退の兆しが見え始める時期で、信濃国府が瓦葺き屋根であったかどうか、移転の時期が下れば下る程瓦葺き屋根の可能性は少なくなる。

このような見地に立って先ず最初に古建築と古瓦との関連を時代的な背景を加えつつ記述したい。

奈良時代から鎌倉時代の日本建築の屋根構造は、中国大陸や朝鮮半島から絶間なく流入する新様式を巧みに同化させながら変遷を続けていた。特に朝鮮半島の百済・高句麗・新羅の影響力は強く538年４人の瓦博士　麻奈父好（マナフホ）、陽貴文（ヤンギフン）、陵貴文（リヤンギフン）、昔麻帝弥（キマチサ）が来日すると蘇我馬子は日本最初の寺院飛鳥寺（中国名法興寺）を建立し屋根は瓦葺きとした。続いて聖徳太子は難波に四天王寺を建立し、更に斑鳩寺（法隆寺）を創建し、金堂に軒丸瓦に加えて、軒平瓦にも文様瓦、忍冬唐草文を初めて使用した。以後朝鮮半島の三国の盛衰は、日本の文様瓦に素弁→単弁→複弁(1)を根底にしながらも、それぞれ異質の属性を伝えた。丸く優美な百済タイプ、細く荒々しい高句麗タイプ、複雑華麗な新羅タイプがそれである。奈良時代も白鳳・天平期となると、それまで寺院建築だけに限られていた瓦葺きが宮廷建築、九州の太宰府、東北の多賀城、駅舎、正倉等の国・官衙にまでも浸透し、更に聖武天皇の勅願による国分寺・尼寺の造立もあり、瓦葺き建造物・大伽藍が隆盛を極めた。平安時代になると文様瓦にも日本化された繊細かつ簡略化文様が現れ、後期には巴文が使われ始める。仏教文化の面でも真言・天台の密教の影響を受けて、今までの平地仏教に変って山岳地帯に寺院が多く建てられるようになる。奈良時代においての瓦の需要の増大は勢い品質の低下を招き、気候の変化の激しい寒冷地などでは凍傷（イテ）や凍上現象などによる雨漏り等瓦葺きの弱点が問題になっていた。その点運搬と言う点からも運び易くかつ費用のかからない、又比較的手に入り易い桧皮葺き、柿皮葺きが使用され始め、その上優雅な貴族生活にマッチした寝殿造りと相俟って、瓦葺き建築は用いられなくなった。平安後期から鎌倉時代になると唐風の建築が新しく伝播し、武家の台頭によって鎌倉彫刻に見られるような豪放さが建築様式にも要求され、屋根の勾配も更に急になり、瓦葺き屋根が見直され始める。仏教文化の上でも浄土宗・禅宗・日蓮宗などが武家文化と融合し、瓦葺き氏寺が盛んに建立されるようになった。

以上の古建築と古瓦の因果関係を敲き台として、惣社地区分布調査に引き続き横田調査員と三村は惣社周辺地区においての既出古瓦の地点（大村・県・筑摩）および平安時代建立と伝えられてい

る海岸寺址（入山辺桐原）神宮寺（浅間温泉）も併せて分布調査を行った。

II　分布調査

調査地区の現状は急速に進行する住宅の密集化、調査不可能な水田、客土に覆われた畑地等と悪条件に阻まれて思うような調査が出来なかった。分布していた瓦類は江戸時代以降の桟瓦（創始－延宝2年〔1674〕）のみであった。古瓦既出地点およびその周辺には土師・須恵・灰釉陶器・中近世陶器の散布は濃密である事が確認された。海岸寺址・神宮寺共に既出古瓦の知見はなく、周辺一帯を隈なく踏査を行ったがその存在は認められなかった。

III　古瓦の出土した遺跡と地点

(1)　大村廃寺址　　松本市大村堂田

大村廃寺址のある大村は惣社と浅間温泉に南北から挟まれた南に傾斜する平坦地で、標高は600m、東部に筑摩山脈の支脈である妙義山、玄向寺山を背にし、西側は女鳥羽川に境界される。地区内には遺跡が多く縄文・土師・須恵・灰釉陶器・中近世陶器および瓦が広範囲に分布し、大村神社南大村遺跡（分布調査・大村地区№1）からは倉科明正氏により製鉄遺構が発見され、鞴羽口、鉄滓が出土している。地区内には第三紀層の良質黒灰色・青灰色粘土が埋蔵されており、古代より現代まで土器・製陶・製瓦が盛んではあったが耐火度が低いのが難点である。1925～1950年までに宮沢亥三男氏により製瓦粘土採取中に堂田地区より、古瓦および大村318番地、現、北野君男氏、小松原道宣氏両家の地下より□来堂と記された墨書土器、約7cm大の金箔張りの木鼻が出土し、道路を挟んだ東側の宮沢亥三男氏宅敷地より古建築材、更に南接地より火葬用合せ甕などが発見されている。

学術調査された大村廃寺址の地点は妙義山（古墳）の麓、長野県営野球場南側テニス・コートに接した堂田地籍で、1950、1951、1965、1966年の4回に渉って行われたが、多数の土師・須恵および少量の灰釉・緑釉・磁器・至道元宝（宋、995）、景祐元宝（宋、1034）既出の皇宋通宝（宋、1039）、元豊通宝（宋、1078）と計4枚の古銭他が発見されている。(2)

※A.　古瓦の出土は平瓦・丸瓦（縄目文・布目文・平行線叩文）、軒平瓦（唐草・珠文）、軒丸瓦（四葉複弁蓮花文・連珠文）を含めて50点以上が発見されているが、平瓦が主体であり、文様構成により、2セットに分類され、平・丸瓦では3セット目を示唆している。

(2)　あがた遺跡　　松本市県3－1－2102－4

あがた遺跡のある県地区は薄川の度重なる氾濫によって急速に堆積して出来た扇状地上に在り、惣社からは清水地区を隔てて南西300mに位置し、東部は縄文前・中期、更には1982年の発掘調査で、弥生時代中期初頭の再葬墓が発見され、九州の遠賀川式や東海地方の影響を受けた条痕文土器

いずれも弥生前期に比定される土器を含めて、土師・須恵・灰釉陶器の散布地に隣接し、2～3㎞先には末期古墳の点在する筑摩山麓が迫っている。南側は源地小学校に接し、その先には薄川が西流している。標高は600m、北西に僅かに傾斜している。地区内は縄文・弥生・土師・須恵・灰釉陶器の濃密な散布地で、特にあがたの森・蚕糸試験場・県ヶ丘高校周辺は古瓦の散布地と思われる。尚あがたの森と蚕糸試験場には南北100mを距て、県塚1号、2号の古墳と推定されている円墳が相対している。

発掘調査されたあがた遺跡の地点は旧制松本高等学校の裏庭敷地西側部分で、現在はあがたの森公園になっている。東側部分は未調査であるが同校が建設されるまでは、あがたの宮の鎮守地であった事は留意すべき事であろう。1980年の発掘調査によって弥生住居址が2軒発見され、火災にあったと思われる住居址からは、良好なる弥生中期末、百瀬式に比定される甕・台付甕が検出され、石器工房址を思わしめる粒度粗・細の2種類の砂岩砥石と共に多数の未完成磨製石鏃・石包丁・完形磨製ノミ型石斧が一括出土し、更に住居址内には軟質の敲き台・敲き石と思わせる石が置かれていた。平安後期住居址からは、土師・須恵・灰釉・緑釉・模様入り金メッキ釵子が出土した。(3)

※B．　古瓦は、平安後期住居址より丸瓦が1点、焼失弥生住居址覆土より、古式土師と伴出して丸瓦1点が出土した。原嘉藤氏は1955年、明科廃寺址調査概報の中で、あがた遺跡内での布目瓦出土を報告している。あがた遺跡より東300m、松本市県3－7－11、地籍番号筑摩2097番地、小岩井英雄氏宅敷地より平瓦が1点、1970年12月12日フェンス取付け基礎工事中に須恵片を伴って出土した。（現在塩野寿夫氏所蔵）今回の分布調査においても、塩野氏の協力によって現地を踏査した処、出土地には、土師・須恵・灰釉片の散布が見られた。隣接北側10m、県ヶ丘高校敷地内からも外面叩き目の残っている布目瓦の小破片が発見されている。

Ⅳ　長野県立松本工業高等学校遺跡　　松本市大字筑摩

松本工業高校遺跡のある筑摩地区は、惣社よりは清水を経て、1.3㎞薄川の南岸にあり東側は里山辺に隣接し、1㎞で林城山に達する。南側は神田を経て、中山地区に達し、近くには弘法山古墳がある。西側は中林・庄内に隣接し、その先には田川が北西流している。地区内には縄文、弥生中・後期・土師・須恵・灰釉陶器が散布し、東部里山辺地区には古墳が点在している。

発掘調査された松本工業高校の地点は薄川の左岸で、富士電機㈱の北側で、東方180mには南小松巾上古墳があり、西方200mには筑摩八幡宮が在る。1978、1980年の2回に渉る調査で、弥生・土師・須恵・灰釉が発見されたが、遺構の検出はできなかった。出土した土器は平安期が主体で、若干の弥生中期百瀬式が出土している。(4)既出遺物として宋銭が出土しているが、実見していない。

※C、古瓦は既出遺物として、丸瓦が1点出土している。（現在・山崎治男氏所蔵）

V 遺物

第25図1は1950年大村堂田地籍より製瓦粘土採取中に発見された軒丸瓦（鐙瓦）で、内区と外区とに二分された二重圏文と珠文とによる文様構成で周縁は中高縁で巾広く1.5cmを計り、頂部は平坦である。外区凹部（花弁部）には珠文11ヶをめぐらし内区中心部には半球形の径2cmの大型の珠文（中房部）を置き周囲に小さな珠文（蓮子或いは花弁部）4ヶを配し、それを区画する様に界圏から4ヶの楔状文（花弁部）が中心部へ平らな面を向けて突き出している。内区内の4分区画は高句麗系の宝相華文(5)の系統を引くものと思われるが、大川清氏は楔状文とその間に配された小珠文を蓮弁の退化したものとして捉えている。いずれにしても平安後期から鎌倉初期に比定されると思われる。瓦当と丸瓦（胴）との接着面が明瞭に瓦当の裏面に残っている。櫛目痕は不明瞭である。技法は平安後期の特長を示す飛鳥様留付けである。色調は瓦当面は淡灰色で裏面接着痕のみ青灰色を呈している。焼成は不良で軟質である。瓦当は17.3×16.3cmで器厚は凸部2.7cm、凹部1.5cmを計った。胴部は欠失している。2は1とセットとして捉えられている軒平瓦（宇瓦）で左部分の破片と思われ、上下に2ヶの珠文が棒状施文具で刺突されている。右側には巾広い溝状の施文がやや左に傾斜して付されている。瓦当面及び顎にも平行線の叩文が施され谷部は細布（糸目1cm四方13×13）の布目痕がついている。色調は青灰色を呈し須恵質で固く焼き締まり、1000度以上の焼成と思われる。平瓦の垂れは折り曲げ段顎で平安後期の特長を見せている。長さは5.5cmを計り、器厚は瓦当部1.8cm谷部2.8cmであった。胎土に小石を含む。

大村廃寺址発掘調査で出土した四葉複弁蓮花文軒丸瓦（鐙瓦）、唐草文軒平瓦（宇瓦）については実見出来なかったので文献（大村廃寺址調査報告概報）により記述したい。

四葉複弁蓮花文軒丸瓦は中央部分のみの破片で周縁は欠失している。花弁は4葉、中房は大きく蓮子は1＋9　蓮弁はきわめて任意に作られたもので正確な分割を実施したものではないと報告されている。花弁は細長く高句麗様式を思わしめる。時期については平安前期に比定されている。同一セットと見られる唐草文軒平瓦は小破片で唐草文と考えて間違いないとされ現存部分の文様は右から左へ延びるもので、均正・偏行唐草文のいずれかは不明であるが顎や下面に縄目が施され上面に粗い布目痕がある。

図版22の下部は大村堂田地籍318番地より発見されたもので木鼻である。金箔張りでいたみが著しい。木鼻とは肘木・頭貫・虹梁等の横木（水平材）の端や或いは柱等を超えて出た処に付けた。又は出たように見せた装飾彫刻の事であり型として象・獅子・獏・龍頭及び拳鼻があり、浄土宗・禅宗の系統による大陸系の建築様式で鎌倉以降のものとされている。(6)如来信仰、同地点出土の□来堂と記された墨書土器はやはり如来堂と読むのが妥当かと思われる。3は1930年大村堂田より出土したもので、日本民俗資料館に展示されているものであるが、1と同類なので説明は省略する。4は平瓦である。これは県1－7－11小岩井莫雄氏敷地より出土の平瓦で小口の切り方は直角で平安

中期から後期の特長を見せている。凍傷による剝離痕があり焼成不良が伺えられる。火を受けて酸化（赤褐色）を呈し、器厚は1.5cmで焼成時の青灰色が僅かに散見される。５は松本工業高校敷地より出土の丸瓦で右側の小口が残っている。頭部から尻部へ向かって稍や狭まって行く平安時代の特長が見える。縄目文背部は淡い青灰色、面部は灰褐色を呈し器厚は1.5cmを計る。２、４、５、いずれの布目も１cm四方（６×６）糸目の荒布であがた遺跡から発掘された２枚の丸瓦も背部縄目文、面の布目文はやはり（６×６）の荒布で器厚も同じ1.5cmであった。火を受けて赤褐色を呈し弥生住居址覆土より出土の右側部分残存の丸瓦は行基式ではないかと報告されたがやはり平安期の松本工業高校出土のものと同類ではないかと思われる。以上いずれの丸・平瓦共に小口（縁）の調整は箆調整であるが粗雑である。布目痕が小口にも見られる処から一枚造りと思われる。

７は松本工業高校敷地より布目丸瓦とともに発見されたいぶし焼き古瓦で両面に箆落書き状のものが見える。厚さは2.2cmで片面灰白色、他面は薄い墨色を呈する。胎土に砂粒を含み、焼成は不良である。小片の為さだかではないが普通の平瓦ではないと思われる。

Ⅵ　まとめ

今回の古瓦分布調査の結果については以上記述したとおりであるが、古建築発見の一つの目安となる古瓦の分布について先ず惣社地区に絞って見ると未だに古瓦の知見がない。一方あがた地区はあがたの森・県ヶ丘高校周辺約300mの範囲内に平安中期から後期に比定されると思われる丸瓦・平瓦が５点余散布している。未だに文様瓦、軒丸瓦（鐙瓦）、軒平瓦（宇瓦）の出土を見ないので時代判別は甚だ漠然とはしているが、一応この地区内に古建築址の存在が伺えるのではないだろうか。薄川南岸の松本工業高校敷地内出土の丸瓦については県地区とは余りにも遠隔地にある点、或いは松本市神田自性院の礎石との関連性も考えなければならないかも知れない。大村廃寺址については同じ堂田地籍出土の□来堂と読みとれる墨書土器と鎌倉時代初現の木鼻及び東側宮沢亥三男氏宅敷地より出土の古建築材（現日本民俗資料館展示）、更に周辺出土の火葬用合せ甕、点在する焼けた大石、堂田、寺田地籍には広範囲に渉って古建築址の埋没が想定される。又、宮沢亥三男氏によれば粘土採取中に木の皮が一面に敷かれるように埋没しているのを発見しているとの事、桧皮葺・柿皮葺建築址の存在が推定される。大村廃寺址の存続年代については、四葉複弁蓮花文軒丸瓦・唐草文軒平瓦のセットを一応平安前期として連珠文軒丸瓦、珠文軒平瓦のセットを平安後期から鎌倉時代と比定し、出土古銭、土師、須恵、陶・磁器、木鼻等総合的に見て平安前期から鎌倉時代と思われる。かつて大川清氏は大村廃寺址出土の古瓦について古瓦の造瓦地を、松本市岡田田溝古窯址及び大村妙義山南麓古窯址に求め得ると示唆したが、ちなみに妙義山南麓第１号古窯址から須恵器片と布目瓦が出土し岡田大口沢菖蒲平第３号古窯址からも発見され更に岡田田溝中の沢第８号古窯址からは玉縁つき有段丸瓦１点を含めて平瓦38点が焚口及び煙出し付近から出土。共に布目と叩文で大

村廃寺址出土の平瓦、及びあがた・筑摩地区出土の丸・平瓦との類似点は前者は叩文、後者は一枚造り技法に見られるのみである。又時期的に見れば、田溝第８号古窯址の出土土器は猿投黒笹40号、折戸10号に相当すると云われ平安中期（９世紀）に比定される(7)ので問題はないのだけれど、比較検討するには余りにも資料が少な過ぎる嫌いがある。今後の資料の新発見にまつ他はない。また岡田田溝古窯址の分布調査も必要と思われる。尚、妙義山南麓古窯址周辺を幾度か踏査を行ったが近世陶器と19世紀と思われるトチンの出土を見たのみであった。松本平に於ける瓦の凍傷の問題については相当深刻で昭和30年松本城修復時の屋根瓦仕様書によると焼成は1100度以上、吸水率は15%以内、24時間－20度に放置して凍傷なきものとしている。ちなみに松本城屋根坪数約450坪解体総数量は80699枚であったと報告されている。(8)

以上今回の古瓦の分布調査に於いて非力の為推定国府に一歩も近づく事は出来なかったけれども、ここに調査に御指導、御協力を頂いた日本民俗資料館、窪田雅之氏、大村　宮沢亥三男氏、里山辺北小松　塩野寿夫氏、里山辺兎川寺　山崎治男氏、入山辺桐原　山内勝氏の各氏に対し深い敬意を表す次第であります。　（三村肇）

参考文献

(1)瓦と屋根構造　佐藤滋朗　学芸出版社

(2)長野県東筑摩郡本郷村廃寺跡調査概報　信濃19巻第10号

(3)あがた遺跡　松本市教育委員会　1981.3

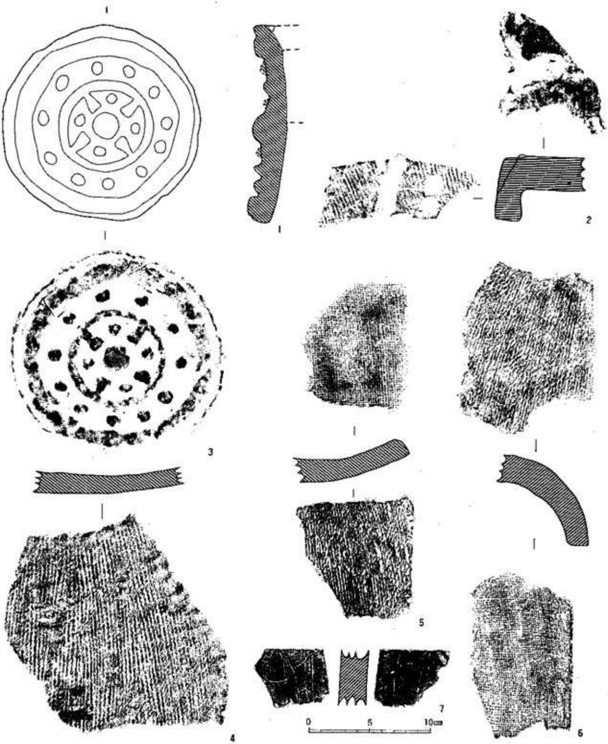
(4)長野県立松本工業高等学校遺跡　松本市教育委員会　1979．3

(5)図鑑瓦屋根　坪井利弘・理工学社

(6)古建築の細部意匠　近藤豊・大河出版社

(7)東筑・松本・塩尻市誌（第２巻歴史上）

(8)松本城　松本市教育委員会



第25図　古　瓦

結　び

発掘調査　二軒の平安時代末期と思われる住居址を検出した。遺構が浅く住居址の上部が削平されていたためか、二軒とも遺物は少量で、完形は土師器坏1点のみで、土師器、灰釉陶器ともに坏類が主で甕類が一点も存在していない。鎌倉時代に入ると煮沸用具として内耳堝が現われるが、その不検出は鎌倉以前を示す。カマドは二軒とも焼土を残すのみで大きさがはっきりしないが、第1号住居址が西側やや北寄り、第2号住居址が東南隅にあたる。溝状遺構は東側が未調査のため具体的に言えないが、形状だけでみれば方形にめぐる溝であり、溝に囲まれた内部に何らかの遺構の存在を期待したが、結果は既述のとおり20本近くの小ピットがあったにすぎない。溝は僅かに東より西へと傾いており、実際に水を通せば流れるが全掘でないのでわからない。ただ溝の廃棄までに若干の時代を感じ、ある期間溝としての存在が続いたことを思わせる。廃棄の時期は礫と共に混入している土器片で推定して本文に示したが、この地周辺が縄文時代から中近世まで量の多寡の差こそあれ続いているので、この地の再利用の際不便、不用となった為であろう。

本年度調査も礫群が出たがその全貌を知るまでは遺構としての意味を持たせずにおきたい。前述の二軒の住居址も河川の自然堆積の凹凸のある砂礫層の上につくられており、薄川の氾濫原であることは確実である。今後の継続調査によって次第に判明されるものと信じている。これらの遺構は即国府に関わるものではないが、平安、鎌倉時代に存在したとする国府の時期に合致することは確かである。

分布調査　惣社地区をくまなく歩いたが遺物の濃密に採集された場所はやはりこの発掘地点周辺であった。しかし表採という条件を忘れてはいけない。つまり耕作の為の天地がえしや深耕によって遺物が地上にあらわれやすいからである。また同一面積における遺物量の比較など、少ない資料を活用して何らかの手掛りを得たいものとは思っている。

今回は等高線についてあたってみたが、610mラインの伊和神社東側の南北道路の両側の集落よりの遺物採集が目立った。この道は伊和神社からみて750m北上しほぼ直角に東へ向い600mで湯の原の南北道路に出る。木下良先生のご研究の中では前述の道を西及び北の境と考え、東は湯の原の道で囲まれる範囲を国府域と考えられておられるが、いずれにしても伊和神社東側の道路を大事にみてゆきたい。

他方では古瓦の分布についても調べてみた。その結果は本文詳述のとおりであるが、松本市内における古瓦の出土例は少なく、大きくみると大村廃寺址周辺、県遺跡周辺となる。当時は瓦の使用が少なくなったというが、官衙、社寺の存在を知る上では瓦は重要であるのでその点更に資料の増

加を期待したい。

以上調査に基づいて記してみたが、最近の松本市内の発掘状況から二三考えてみたい。

現在松本市内では中央道長野線建設に先立つ県営ほ場整備事業が続いており、その為緊急発掘調査が続いている。その結果今までは未調査であった奈良井川左岸の松本市西部地域の古代の様子が解明されつつある。

本年度行った神林地区の下神・町神遺跡では平安時代の住居址80軒、建物址36軒他を検出し、主要遺物は住居址内より奈良三彩小壺を、覆土より佐波理鋺と思われる口縁部破片を出土しており、下神・町神遺跡より北1.5kmに鎖川を渡った島立地区の南栗遺跡では奈良平安時代の住居址15軒、建物址２軒。中世の住居址５軒等が検出され、完形の佐波理鋺１点の他に青銅器４点が出土している。このことは奈良井川左岸では平安時代に入って爆発的ともいえる急激な開発がなされたことを示すものであると共に、権力を有する者の存在や社寺との関係なども伺わせるものであり、併せて古代の道についても示唆するものである。それは信濃国府の存在にも関わることであり、今後更に調査が進めば外側より国府解明の手がかりが得られるのではないかと期待している。

最後になったが今回の調査では多くの方々のご理解、ご指導、ご協力をいただいた。特に蚕糸試験場には昨年に引き続いて用地発掘をご快諾いただいた。厚く御礼申し上げる。また本郷地区、とりわけ惣社町会、公民館には町民への衆知、公民館使用などの他作業員の勧誘等目に見えないところでご協力をいただいた。またご指導いただいた木下先生、山中先生、桐原先生はじめ調査にたずさわった調査員、作業員の方々、整理作業と報告書づくりにご協力いただいた多くの方々に心から御礼申し上げ、今後の調査にもご指導、ご協力をお願いするものである。（神沢　昌二郎）

表1　発掘出土遺物集計表

（重量単位　g）

出土地点	土師器 数量	土師器 重量	須恵器 数量	須恵器 重量	灰釉陶器 数量	灰釉陶器 重量	中近世陶器 数量	中近世陶器 重量	その他 数量	その他 重量	合計 数量	合計 重量
第1号住居址	49	413.4	3	19.4	4	32.0	1	6.0			57	470.8
第1号住居址検出面	2	18.9			4	25.0	2	6.5			8	50.4
第2号住居址	5	43.2			2	152.6			縄文 2	20.8	9	216.6
検出面	20	97.5	3	118.5	2	7.1	11	43.8			36	266.9
Aグリット（第1住東北側）	6	62.6	2	64.1	4	36.4	2	3.9			14	167.0
B 〃 （ 〃 ）	2	3.5			1	3.7	2	19.9			5	27.1
C 〃 （ 〃 ）	20	80.2			2	5.4					22	86.6
D 〃 （ 〃 ）	6	24.0			1	39.7	1	13.7	石板 1	12.8	9	90.2
溝状遺構	105	287.5	1	162.0	9	82.9	5	226.7	羽ガマ 1 フイゴの口 7	11.6 27.6	127	798.3
南グリット東	12	23.4			1	6.5	9	63.1			22	93.0
礫群	2	16.1	6	76.8	8	49.1	8	200.3			24	342.3
発掘地点表採	23	132.1									23	132.1
合計	252	1202.4	15	440.8	38	440.4	41	583.9	11	72.8	357	2740.3

表2　分布調査採集遺物集計表

（重量単位　g）

調査地　惣社地区			土師器					須恵器							灰釉陶器						中・近世陶器									その他
No.	地番	地目	坏	壺	甕	不明	重量	坏	碗	壺	甕	坏蓋	その他	重量	坏	碗	壺	甕	不明	重量	碗	甕	擂鉢	皿	鉢	徳利	その他	不明	重量	
1	511-2	畑																			4		1			1		4	90.75	石器　64.9
2	520	畑		1			28																1						5.35	
3	521-2	畑																												
4	528-2	畑														1				13.3	1	1							92.5	
5	526-1	果樹園						1						6.6								1								
6	530-1	畑			2		13.75											1		76.55		2					1	2	216.9	石器　4100
7	585-1	畑																												
8	550-5	畑																												
9	552	空地														1				3.45										
10	553-8	果樹園																												
11	442-2	宅地								1				30.25																
12	71-8	果樹園																												
13	418 416-1 437-1 438-1	果樹園	1		1		7.5		1					16.2							天目他 2							7	37.2	
14	436-2	空地				1	1.25																							
15	78～81	果樹園																					1						32.95	
16	82	果樹園																									香炉 1 小壺 1	1	19.1	
17	83.84	果樹園																												
18																														
19	91.92.93.94-1	畑、田																				2						2	51.5	
20	95～100	畑、田																												
21	45　ロ号	果樹園																				1							4.6	

表 2　　分布調査採集遺物集計表

（重量単位　g）

調査地 惣社地区			土師器					須恵器							灰釉陶器						中・近世陶器									その他
No.	地番	地目	坏	壺	甕	不明	重量	坏	碗	壺	甕	坏蓋	その他	重量	坏	碗	壺	甕	不明	重量	碗	甕	擂鉢	皿	鉢	徳利	その他	不明	重量	
22	11.19	畑、田																					1			1		6	80.5	
23	54.56	果樹園 田																												
24	392-2	畑									1			23.6							1						1	4	36.5	
25	408-2 411 412	畑																				1	1				フタ 1		116.5	
26	452-3	宅地他									2			149.35																
27	460	果樹園																			1	1				3	皿 1	2	156.6	
28	463-1 464	果樹園	1				13.5																							
29	465-3 ~5	畑													1					12.5							1	4	29.7	
30	471-1	果樹園																									1		4.6	
31	477-1 478-1 479-1 480-4	果樹園																			1							6	30.5	縄文片 11.5
32	535-2 535-3	畑																												
33	481-1 481-4	畑																				1					2		50.75	
34	495-1 489-1 491-1.2 492	田																												
35	487-1 847-4	畑																												
36	472-1	宅地			1		6.95				1	2		76.4																
37	406	果樹園									1			68.9					1	24.4								5	12.35	
38	402 404 405 407 408-1	畑			1		11.55												1	6.05		2		灯明皿 1				12	119.5	
39	397 398-1.2 391-1	果樹園																			1							1	24.0	
40	372	畑						1						8.17							1	3			2		フタ 1	8	145.84	

表2　分布調査採集遺物集計表

（重量単位　g）

調査地 惣社地区			土師器					須恵器							灰釉陶器						中・近世陶器									その他
No.	地番	地目	坏	壺	甕	不明	重量	坏	碗	壺	甕	坏蓋	その他	重量	坏	碗	壺	甕	不明	重量	碗	甕	擂鉢	皿	鉢	徳利	その他	不明	重量	
41	377-1	畑																						灯明皿 1					10.67	
42	361-1																													大村氏宅
43	362 364 ~366 367-1	畑																			2		1		1				35.65	
44	1-1																													
45	369-2																													石器 263.7 841.0
46	352-2	畑																												
47	356 354-1	畑、田																												
48	337 338-1 339-1.2 340-1	畑 田																												
49	344-1 345-1 346 347-1	果樹園 田									1			61.35																
50	282 283- 1 284 285 286-1	田																			2							1	18.1	
51	349 276-1	畑																												
52	1039 1048-1 1049 1050	畑																									3		5.15	
53	43	畑、田																												
54	133 ~136	畑																					1						10.85	
55	1002~1004 1006 1008	果樹園																			1								6.95	
56	1005 63	畑																												
57	104-1	畑									1			26.0							2				2			2	36.0	

表2　分布調査採集遺物集計表

（重量単位　g）

調査地 惣社地区			土師器					須恵器							灰釉陶器						中・近世陶器									その他
No.	地番	地目	坏	壷	甕	不明	重量	坏	碗	壷	甕	坏蓋	その他	重量	坏	碗	壷	甕	不明	重量	碗	甕	擂鉢	皿	鉢	徳利	その他	不明	重量	
58	103 102-1	果樹園																			3		1	1			仏具 1	5	131.2	
59																														早川宅
60	117-1	花卉畑																												
61	113	果樹園								1				31.9														3	8.0	
62	198-1	造成地													1					63.0										
63	196-1 200-1 204 205	果樹園									1	1		17.65													1	1	9.2	
64	210 215-1 216-2	果樹園																				1							83.7	
65	216-1 217 218 220-1 222-1 235 ～238	桑畑						2			2	1		74.05		1				9.95	5 1 天目	3	2	1		2	坏蓋 1	17	363.1	黒曜石 1 6.25
66	266-1.2 267-1	畑																												
67	61-1 63 65	畑																				1			1				28.7	
68		果樹園																			3			2				6	55.7	土地改良中
69		果樹園	3				4.3				1			4.5																〃
70		畑						1						1.75	2	1				31.6			1		3		6	5	84.25	〃
71		畑						1						17.3	1					27.23										〃
72	601	畑	5				3.84	1			9			196.1	3	5		3	2	154.25	1 青磁	1	1				土鍋他 3	20	162.0	鉄滓 54.15
73		畑																												
74		畑	1				4.0																							
75	1186-1	畑																												
76	546-1	宅地																												石器 1600 645

表2　分布調査採集遺物集計表

（重量単位　g）

調査地　惣社地区			土師器					須恵器							灰釉陶器						中・近世陶器									その他
No.	地番	地目	坏	壺	甕	不明	重量	坏	碗	壺	甕	坏蓋	その他	重量	坏	碗	壺	甕	不明	重量	碗	甕	擂鉢	皿	鉢	徳利	その他	不明	重量	
77	521-1 516 イ号-1 ロ号-1	畑																1		12.0	1								2.0	
78	553-5	畑																	小瓶 1	301.0										
79	558-5	道	1	1			13.05																							

（重量単位　g）

調査地　大村地区			土師器					須恵器							灰釉陶器						中・近世陶器									その他
No.	名称	地目	坏	壺	甕	不明	重量	坏	碗	壺	甕	坏蓋	不明	重量	坏	碗	壺	甕	不明	重量	碗	甕	擂鉢	皿	鉢	徳利	その他	不明	重量	
1	大村遺跡	畑						3			2			55.5																縄文159.2
2	大村神社北	畑	高坏 1		10	3	90.5	18		1	31	4		210.5							2			灯明皿1			4		47.5	
3	旧国鉄車庫東	畑	9		6		133.7	25		1	18	7		501.3		1				4.6							1	1	38.1	
4	〃　東南	畑	2		2		38.5	9		3	16	2		357.7		1				3.1	2	1					1	2	132.2	
5	本郷高校東	水田、畑	1		1		3.8	3		1	8	3		148.3							4	3	1	灯明皿2			9		52.1	
6	〃　南	畑	2		7	10	165.2	22		4	15		3	712.6								3	1				2	2	120.1	打斧 2　225.3

表3　土器観察表

挿図 No	遺物 No	図版 No	種別	器種	残存部位	寸法 口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	成形方法・器形の特徴	色調 外面	内面	断面	胎土・焼成	出土地点・その他
7	1	13	土師	坏	1/5	(7.9)	(2.5)	1.7	ロクロ(内外面)・糸切底・内黒土器	にぶい橙	黒	にぶい橙	微粒含　良	1住No.1
	2	13	土師	坏	完形	8.5	3.3	1.5	ロクロ・糸切底・渦文状成形	茶	茶	茶	3mm程度の粒子含　良	1住No.8
	3	13	土師	坏	底	—	(6.8)	—	ロクロ・糸切底・内面中央にくぼみ	茶	茶	茶	微粒含　良	1住覆土
	4		土師	坏	口縁	(9.7)	—	—	ロクロ	うす茶	うす茶一部黒	ねずみ	緻密　良	1住No.1Pit No.8
	5		土師	坏	口縁	(11.0)	—	—	ロクロ	うすこげ茶	うすこげ茶	うすこげ茶	微粒子多くざらつく　良	〃
	6		土師	坏	口縁	(12.1)	—	—	ロクロ	うす茶	うす茶	うす茶	微粒子含　良	1住No.1Pit内
	7		土師	坏	底	—	(6.7)	—	ロクロ	赤褐	赤褐	茶	良　良	1住No.3
	8		灰釉陶器	坏	底	—	(7.6)	—	ロクロ・つけ高台	灰白	灰白	灰白	緻密　堅緻	1住No.1Pit内No.16
	9		土師	坏	1/6	(9.0)	(3.0)	1.6	ロクロ(内外面)・糸切底・内黒土器	うす茶	うす茶一部黒	うす茶	微粒含　良	1住No.1
	10		土師	-	底	—	(6.5)	—	ロクロ・糸切底・器種不明	橙	橙	橙	良　良	1住No.61
	11	13	土師	坏	底	—	(6.1)	—	ロクロ・糸切底	ウス茶(にぶい橙)	ウス茶	ウス茶	良　良	1住検出面
	12	13	土師	坏	底	—	(8.8)	—	ロクロ・内面ロクロ・糸切底	ウス茶	茶灰	ウス茶	良　良	1住No.12
	13	16	磁器	碗	口縁	(21.0)	—	—	ロクロ・内面釉・山茶碗的なもの	灰白	ウス緑茶	灰白	良　良	1住No.1Pit内No.14
	14		灰釉陶器	—	—	—	—	—	回転ヘラけずり・内面ロクロ	ウス灰緑	灰白	灰白	良　堅緻	1住No.11
	15	15	灰釉陶器	坏	底	—	(7.4)	—	回転ヘラけずり・内面渦状紋・つけ高台 底部回転ヘラ切り・内面重ねあとあり・釉かけ5回位	灰白	灰白	灰白	小白粒含　堅緻	2住No.10
	16	15	灰釉陶器	甕	胴	—	—	—	回転ヘラけずり・内面ロクロ・外面釉	緑灰	灰白	灰白	緻密　堅緻	2住No.9
9	20	13	土師	高坏	底	—	—	—	ロクロ・坏部を作って脚部はりつけ	黄茶	茶	茶	良　良	ミゾ内
	21		土師	坏	口縁	(9.3)	—	—	ロクロ	ウス茶	ウス茶	ウス茶	良　良	南側ミゾ内
	22	13	土師	坏	1/6	(11.1)	—	(2.1)	ロクロ・外面摩耗	ウス茶	ウス茶	ウス茶	良　良	ミゾNo.1
	23	13	土師	甕	底	—	(6.4)	—	ロクロ・糸切底・ヘラなで	ウス茶	ウス茶	茶	良小粒含　良	ミゾNo.4
	24		緑釉陶器	坏	口縁	(13.4)	—	—	ロクロ・釉部のみで剥落	黄灰緑	黄緑	白	良　堅緻	ミゾ内
	25	15	灰釉陶器	坏	底	—	(6.7)	—	ロクロ・回転ヘラけずり・つけ高台	灰白	灰白	灰白	緻密　堅緻	ミゾNo.8
	26	15	灰釉陶器	坏	底	—	(5.2)	—	ロクロ・回転ヘラけずり・つけ高台	灰白	灰白	灰白	緻密　堅緻	南側ミゾ
	27		灰釉陶器	壺?	頸	—	—	—	ロクロ	灰白	灰白	灰白	緻密　堅緻	ミゾNo.1
	28		灰釉陶器	—	—	—	—	—	ロクロ	灰白	灰白	灰白	緻密　堅緻	南側ミゾ
	29		陶器	碗	口縁	(15.4)	—	—	ロクロ・内外面にうすい釉・貫入あり	オリーブ灰	灰白	灰白	緻密　堅緻	ミゾNo.6
	30	14	磁器	碗	口縁	(17.0)	—	—	ロクロ・外面10本あまりの櫛状施文具でたてに施文 内面には胎剤あり・両面に釉がけ	オリーブ灰	オリーブ灰	灰	小粒子あり　堅緻	ミゾNo.5
	31		土師質土器	羽釜	鍔	—	—	—	ロクロ・鍔下部黒色他	灰茶一部黒	灰茶	灰茶	緻密　良	ミゾNo.1
	32		陶器	鉢	口縁	(28.0)	—	—	横なで	にぶい赤褐	にぶい赤褐	茶褐	良　堅緻	ミゾ確認
	37		陶器	泥メンコ	—	—	—	—	型押し・文様不明・緑ねずみ色の色をつけている	ねずみ	茶白	茶白	緻密　堅緻	ミゾ西側
	38		土師	羽口	—	—	—	—		茶	茶	茶	良　良	ミゾNo.2

挿図No	遺物No	図版No	種別	器種	残存部位	寸法 口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	成形方法・器形の特徴	色調 外面	内面	断面	胎土・焼成	出土地点・その他
7	39		土師器	坏	口縁	(14.7)	—	—	ロクロ・へらけずり・内ぐろ	ウス茶	黒	ウス茶	小粒含　良	南グリット東
	40		土師器	坏	底	—	(6.4)	—	ロクロ・糸切底	茶	ウスこげ茶	ウスこげ茶	良　良	南集石No. 3
	41		土師器	坏	底	—	(5.0)	—	ロクロ・糸切底	橙（茶）	橙	橙	良　良	南集石No. 2
	42		土師器	高坏	胴	—	—	—	ロクロ・坏部をつくってより脚部をつける	赤茶	赤茶	赤茶	良　稍良	検出面
	43	13	土師器	坏	底	—	(4.4)	—	ロクロ・糸切底	ウス茶	ウス茶	ウス茶	良　稍良	2住検出面
	44		土師器	坏	底	—	(7.5)	—	ロクロ・内ぐろ	赤褐	黒	赤褐	小白粒含　良	〃
	45	15	須恵器		底	—	(9.4)	—	底部回転ヘラ切り・底内面不整形高台欠損	灰白	ウス青灰	灰白	小粒含　良	検出面
	46		灰釉陶器	皿	口縁	(9.3)	—	—	ロクロ・外面に透明釉かかる	灰白	茶灰白	灰白	緻密　堅緻	南グリット東
	47		灰釉陶器	坏	口縁	(10.5)	—	—	ロクロ・内面，外面　上部釉	灰白	灰白	灰白	緻密　堅緻	検出面
	48	15	灰釉陶器	坏	底	—	(8.7)	—	ロクロ底回転ヘラ切り・つけ高台	灰白	灰白	灰白	緻密　堅緻	〃
	49	15	灰釉陶器	坏	胴	—	—	—	ロクロ・釉つけがけ	灰白	灰白	灰白	緻密　堅緻	南集石
	50		磁器	碗	胴	—	—	—	縦にけずりあり・灰緑釉厚くかかる・青磁・	灰緑	灰緑	灰白	緻密　堅緻	南G東
	51	14	磁器	碗	口縁	(7.3)	—	—	釉は吹きつけ	白・藍	白・藍	白	緻密　堅緻	2住検出面
	52		磁器	碗	底	—	(9.5)	—	底ヘラ切り・両面釉	ウス灰緑	ウス灰緑	灰白	緻密　堅緻	南G東
	53		灰釉陶器	壺	肩	—	—	—	外面ヘラけずり・内面ロクロ・釉がけ	ウス灰緑	灰白	灰白	緻密　堅緻	D
	54		土師器	坏	口縁	(9.8)	—	—	ロクロ	茶	白茶	茶	良　良	検出面
	55		土師器	坏	口縁	(16.8)	—	—	ロクロ	橙	橙	橙	良　良	〃
	56		土師器	坏	底	—	(6.1)	—	ロクロ・つけ高台	茶褐	茶褐	茶褐	7㎜大の小石含　良	〃
	57	15	土師器	坏	底	—	—	—	ロクロ・内面刻線あり	茶	茶	茶	良　良	〃
	58	15	須恵器	坏	口縁	(16.8)	—	—	内外面ロクロ整形	灰黒	灰黒	灰黒	小石含　堅緻	〃
	59		灰釉陶器	坏	口縁	(12.8)	—	—	ロクロ・灰釉	ウス緑灰	ウス緑灰	灰白	緻密　堅緻	〃
8	60		灰釉陶器	坏	口縁	(20.6)	—	—	ロクロ・内，外面灰釉	灰白	灰白	灰白	緻密　堅緻	〃
	61		灰釉陶器	壺	口縁	(16.0)	—	—	ロクロ・特に成形時についたあとあり	灰白	灰白	灰白	緻密　堅緻	[illegible]
	62		須恵器	甕	—	—	—	—	ロクロ・タタキ目	茶ネズミ	茶ネズミ	ネズミ	緻密　良	検出面
	63	14	磁器	碗	口縁	(9.8)	—	—	草花文染付・内面網状文	ウス青白	ウス青白	白	緻密　堅緻	〃
13	67	21	灰釉陶器	坏	底		(5.7)	—	ロクロ・糸切底・つけ高台・内面灰釉斑点状につく 段違状に段あり	灰白	灰白	灰白	緻密　稍良	分布調査 No. 4
	68		灰釉陶器	坏	—	—	—	—	内ロクロ・外回転ヘラけずり	灰白	灰白	灰白	緻密　堅緻	No. 5
	69		陶器	碗	口縁	(14.4)	—	—	ロクロ・内，外釉	浅黄	浅黄	灰白	緻密　堅緻	〃
	71	19	陶器	四耳壺	耳	—	—	—	内面調整かなり凹凸あり 外面 0.3㎜厚の釉・横位の環状つまみ	暗緑	灰赤	灰	小石含　堅緻	No. 6　両際釉の破片あり
	72	21	灰釉陶器	—	底	—	(14.0)	—	外ロクロ・底回りヘラ切り・底部指頭圧痕あり・内面ロクロ	灰白	灰白	灰白	微粒含　稍良	〃　灰釉というより灰釉質

挿図No	遺物No	図版No	種別	器種	残存部位	寸法 口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	成形方法・器形の特徴	色調 外面	内面	断面	胎土・焼成		出土地点・その他	
14	73		灰釉陶器	—	頸部	—	—	—	外回転ヘラけずり・ロクロ・内ロクロ・内部一部灰釉	灰白	灰白	灰白	良	精良	No11	
	75		須恵器	—	—	—	—	—		灰ネズ	灰ネズ	青灰	緻密	良	No13	
	78		陶器	鉢	底	—	(10.5)	—	ロクロ・内部2ヶ所にトチンあと残る・高台近くまで鉄釉かかる	暗赤褐	アメ色	黒灰	良	堅緻	No25	近世
	79	16	須恵器	甕	—	—	—	—	外面格子状タタキ目・内面同心円文	黒灰	黒灰	赤褐	良	良	No26	
	80	19	須恵器	甕	—	—	—	—	外面タタキ目・内ヨコナデ	灰白	灰白	灰白	良	良	〃	
	81	16	須恵器	甕	—	—	—	—	まき上げ横なで・頸部二本組の沈線と波状文 胴部タタキ目・内面同心円文	黒灰	灰	にぶい赤	白粒含 緻密	良	〃	
	82		陶器	—	—	—	-	—	ロクロ・内外釉貫入あり	灰オリーブ	灰	灰	緻密	堅緻	No27	
	83		土師器	坏	底	—	(4.0)	—	ロクロ・糸切底・（へらだて?）	橙	にぶい橙	にぶい橙	良	精良	No28	
15	84		陶器	急須状	口縁	(8.4)	—	—	ロクロ	黒	黒	にぶい赤褐	緻密	堅緻	No29	
	85		灰釉陶器	坏	底	—	(4.6)	—	内外ロクロ・糸切底・つけ高台	灰黄	灰黄	灰黄	緻密	堅緻	〃	
	87		土師器	—	底辺近く	—	—	—	外面ヘラけずり・内面ロクロ	淡橙	淡橙	淡橙	5㎜大の礫含む	良	No33	
	88		陶器	灯明皿	口縁	(10.0)	—	—	回転ヘラけずり・内面全部と外面口縁部に鉄釉・外面スス状黒色物付着	黒褐	茶褐	灰茶	緻密	堅緻	〃	
	89		土師器	—	—	—	—	—	ロクロ	橙	にぶい橙	にぶい橙	小白粒含	精良	No36	
	90	16	須恵器	—	—	—	—	—	外回転ヘラけずり・内ロクロ	灰白	灰白	灰白	緻密	精良	〃	提瓶などのフタ状はめ込み部分か
	91		須恵器	—	—	—	—	—	外回転ヘラけずり・内ナデか	灰	灰	灰白	緻密	良	〃	坏蓋か
	92	19	須恵器	—	—	—	—	—	外タタキ目・内圧痕あり・不整面	灰	灰	灰	緻密	良	〃	
	94	19	須恵器	—	—	—	-	—	外タタキ目に釉あり・内ヨコナデ	灰白	灰	灰	4㎜の小石含	良	No37	陶器かも知れない
	95		灰釉陶器	—	—	-	—	—	ロクロ・内面僅かに灰釉かかる	灰白	灰白	灰白	緻密	堅緻	〃	
	96	19	陶器	灯明皿	—	(9.8)	—	—	内ロクロ・外回転ヘラけずり・内、外面口縁に釉貫入	灰茶	浅黄	灰白	緻密	堅緻	No41	
16	99	19	須恵器	甕	—	—	—	—	外タタキ目・内ナデ・内面にモミ状圧痕あり	暗青灰	青灰	灰赤と灰	緻密	良	No49	
	101	19	須恵器	—	—	—	—	—	外タタキ目・内ヨコナデ	灰	灰	灰	緻密	良	No57	
	102	19	陶器	—	底	—	3.0	—	ロクロ・底裏文釉あり・外底近く釉なし・糸切底	赤褐	暗赤褐	黒	白色微粒含	堅緻	No58	江戸末期か
	103	16	須恵器	—	頸	—	—	—		灰白	灰白	灰白	小白粒含 緻密	精良	No61	
	104		須恵器	—	—	—	-	—	外タタキ目	灰白	灰白	灰白	小白粒含	良	No63	須恵というより粕軽い感じ
	105		須恵器		底	—	7.7	—	外回転ヘラけずり・内ロクロ・底回転ヘラけずり	灰	灰	灰黄	小粒含 緻密	精良	No64	
	106		灰釉陶器	坏	底	—	(6.3)	—	外回転ヘラけずり・内灰釉斑点状につく・つけ高台	ウス茶灰	ウス茶灰	ウス茶灰	緻密	堅緻	No65	
	107		須恵器	坏	底	--	(8.9)	—	底ロクロ・内ロクロ・高台外側そり上り	青灰	青灰	灰赤	緻密	良	〃	
	108	16	須恵器	—	—	—	—	—	外回転ヘラけずり・内ナデ・器形は坏蓋か瓶の頂部ではないか	緑灰	緑灰	緑灰	緻密	良	〃	
	109		須恵器	長頸瓶	口縁	(4.7)	—	—	外ロクロ・内ロクロ	黒灰	灰	灰	緻密	良	No68	
	110		陶器	碗	底	--	(5.6)	—	内外面釉貫入あり・底内部ロクロ	オリーブ灰	灰白	灰白	緻密	堅緻	〃	

挿図No	遺物No	図版No	種別	器種	残存部位	寸法 口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	成形方法・器形の特徴	色調 外面	内面	断面	胎土・焼成	出土地点・その他
	111		陶器	皿	底	—	(4.4)	—	内外ロクロナデ・底回転ヘラ切り・内面釉	灰白	浅黄	灰白	緻密 堅緻	No.68
	112		陶器	—	—	—	—	—	ロクロ・外底点状に釉あり・内ヨコナデあと・タテにもなでている	黒紫	灰赤	暗灰	緻密 堅緻	〃
	114		灰釉陶器	坏	底	—	(7.7)	—	ロクロ・糸切底・つけ高台	にぶい黄橙	浅黄橙	にぶい黄橙	緻密 堅緻	No.70
	115		須恵器	坏	底	—	(10.2)	—	ロクロ・つけ高台	灰	灰	灰	緻密 良	〃
	116		灰釉陶器	坏	底	—	(8.9)	—	ロクロなで・つけ高台	灰白	灰白	灰白	緻密 堅緻	No.71
	117	19	須恵器	—	—	—	—	—	外タタキ目・ロクロ	褐灰	灰褐	灰褐	緻密 良	No.72
	118		須恵器	—	—	—	—	—	外タタキ目・内ナデ	鉄茶	黒ウス	ネズミ	緻密 良	〃
	119	19	須恵器	—	—	—	—	—	外タタキ目ヨコナデのあと・内ヨコナデのあと	灰白	灰白	灰白	小石含 良 石ハゼあり 良	〃
	120		須恵器	—	—	—	—	—	外タタキ目・内圧痕あり	灰赤	灰赤	にぶい赤褐	緻密 良	〃
	121		須恵器	…	—	—	—	—	外タタキ目・内圧痕あり	黒	ネズミ	黒灰	緻密 良	〃
17	122		土師質土器	坏	底	—	—	—	ロクロ・糸切底・土師質であるが、かたい感じ	にぶい褐	にぶい褐	にぶい褐	緻密 堅緻	〃
	123		灰釉陶器	坏	底	—	—	—	底回転ヘラキリ・つけ高台・内面釉薄点状につく	灰白	灰白	灰白	緻密 堅緻	〃
	124	21	灰釉陶器	坏	底	—	(6.2)	—	回転ヘラけずり・糸切底・つけ高台・内ロクロ重ねやきあとあり	灰白	灰白	灰白	緻密 堅緻	〃
	125		灰釉陶器	坏	口縁	—	—	—	外回転ヘラけずり・内ロクロ・釉内面及外面上部	灰白	灰白	灰白	緻密 堅緻	〃 釉色灰白（稍オリーブがかる）
	126		灰釉陶器	—	—	—	—	—	外回転ヘラけずり・内研磨つよし	灰オリーブ	灰白	灰白	緻密 堅緻	〃 瓶らしい
	127	19	灰釉陶器	壺?	底	—	(11.4)	—	一部ヘラけずり・内ロクロ・内面中心部灰釉あり・底部にモミ状圧痕文あり	灰黄	灰白	灰白	緻密 堅緻	〃
	128		土師質土器	内耳鍋?	—	—	—	—	底部にモミ状圧痕あり	にぶい赤褐	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良 良	〃
	129		土師質土器	坏?	口縁	(22.5)	—	—	外マキアゲ・ロクロ・内ロクロ	にぶい褐	にぶい橙	にぶい橙	良 良	〃
	130	19	陶器	擂鉢	底部付近	(16.0)	—	—	けずりロクロ・目は 7本単位・巾 1.5cm・目は粗い・	にぶい黄橙	にぶい橙	にぶい橙	小白粒含 良	〃
18	131	21	灰釉陶器	小瓶	頸部以下	—	(6.0)	—	回転ヘラけずり・糸切底	灰白	灰白	灰白	緻密 堅緻	No.78
19	134		須恵器	坏	口縁	(13.0)	—	—	ロクロ	青灰	青灰	灰白	小白粒含 良 良	大村分布 No.3
	135		須恵器	坏	口縁	(12.6)	—	—	ロクロ	青灰	青灰	にぶい赤灰	良 良	〃
	136		須恵器	坏	口縁	(14.4)	—	—	ロクロ	青黒	灰白	灰白	緻密 良	〃
	137		須恵器	坏	口縁	(15.3)	—	—	ロクロ	ウス青灰	ウス青灰	灰白	良 良	〃
	138		須恵器	坏	口縁	(16.3)	—	—	ロクロ	青灰	青灰	青灰	良 良	〃
	139		須恵器	坏	口縁	(18.2)	—	—	ロクロ	青灰白	青灰白	青灰白	良 良	〃
	140		須恵器	坏蓋	つまみ部	—	—	—	内ロクロ・ヘラけずり	ウス青灰	ウス青灰	ウス青灰	小白粒多シ 良	〃
	141		須恵器	—	—	—	—	—	ロクロ	黒灰	ウス茶灰	灰白	良 良	〃
	142		須恵器	坏蓋	端部	(17.5)	—	—	ロクロ	濃青灰	濃青灰	にぶい赤灰	良 良	〃
	143		須恵器	坏蓋	端部	(16.3)	—	—	ロクロ	青灰	青灰	灰白	良 良	〃

挿図No	遺物No	図版No	種別	器種	残存部位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	成形方法・器形の特徴	色調 外面	色調 内面	色調 断面	胎土・焼成	出土地点・その他
	144		須恵器	坏蓋	端部近く	(10.1)	—	—	ロクロ	ウス赤茶	灰白	ウス茶	良　精良	大村分布No.3
	145		須恵器	壷	口縁	(14.0)	—	—	ロクロ	ネズミ	ネズミ	ネズミ	良　良	〃
	146		須恵器	—	—	—	(6.7)	—	ロクロ	青灰	青灰	青灰	良　良	〃
	147		須恵器	坏	底	—	(8.2)	—	ロクロ	灰白	ウス茶灰白	ウス茶灰白	良　良	〃
	148		須恵器	坏	底	—	(8.7)	—	ロクロ・糸切底	灰白	灰白	灰白	小白粒含 良　良	〃
	149		須恵器	坏	底	—	(7.6)	—	ロクロ	青灰	青灰	にぶい青灰	小白粒 レキ含　良	〃
	150		須恵器	坏	底	—	(10.8)	—	糸切底・つけ高台	ウス茶白	ウス茶白	灰白	良　良	〃
	151		須恵器	坏	底	—	(11.7)	—	ロクロ・底ヘラけずり	青灰	青灰	青灰	良　良	〃
	152		須恵器	甕	底	—	(8.3)	—	ロクロ・底ヘラけずり	青灰	青灰	青灰	良　良	〃
	153		須恵器	坏	底部近く	—	—	—	ロクロ	青灰	青灰	青灰	良　良	〃
	154		須恵器	甕	胴	—	—	—	ロクロ・タタキ目	濃青灰	濃青灰	濃青灰	良　良	〃
20	155		須恵器		頸	-	—	—	ロクロ・頸部つけ	青灰	青灰	青灰・にぶい赤灰	良　良	〃
	156		灰釉質陶器	—	—	—	—	—	タタキ目・内面ナデ	灰白	灰白	灰白	良　堅緻	〃　須恵の生やけか かるい
	157		灰釉陶器	坏	口縁	(15.0)	—	—	ロクロ	灰白	灰白・ウス茶緑	灰白	良　堅緻	〃　内面釉
	158		土師質土器	—	—	—	—	—	ロクロ	ウス茶	茶	茶	良　良	〃
	159	21	土師質土器	坏	底部近く	—	(9.7)	—	ロクロ	ウス茶	ウス茶	ウス茶	良　良	〃
	160		縄文		胴	—	—	—	沈線文	黄褐	黄褐	黄褐	小石含　良	大村分布No.1
	161		縄文		胴	—	—	—	沈線文・隆帯	茶	茶	茶	良　良	〃
	162		縄文		胴	—	—	—	すりけし縄文	茶褐	茶褐	茶褐	小礫含　良	〃
	163		須恵器	坏	底	—	(6.7)	—	ロクロ・糸切底	青灰	青灰	青灰	良　堅緻	〃
	164		須恵器	坏	底	—	(9.0)	-	ロクロ・糸切底	灰	灰	灰白	良　堅緻	〃
	165		須恵器	坏	底近く	—	-	—	ロクロ	灰白	灰	にぶい赤灰	良　堅緻	〃
	166		須恵器	坏	底近く	—	—	—	外ヘラけずり・内ロクロ	灰白	灰白	灰白	良　堅緻	〃
	167		須恵器			—	—	—	ロクロ・タタキ目	黒ネズ	濃青灰	赤灰	良　堅緻	大村分布No.2
	168		須恵器	坏	底	—	(6.5)	—	底ヘラ切り・内ロクロ	灰白	灰白	ウス灰茶	良　堅緻	〃
	169		須恵器	坏	底	—	(8.3)	—	ロクロ・糸切底	青灰	青灰	濃青灰	良　堅緻	〃
	170		須恵器	坏	口縁	(12.3)	—	—	ロクロ	ウス茶	ウス茶	ウス茶	良　良	〃　生やけか
	171		須恵器	坏	口縁	(14.3)	—	—	ロクロ	青灰	青灰	濃青灰	良　良	〃
	172		須恵器	坏		(15.5)	—	—	ロクロ	灰茶	青灰	青灰	良　良	〃
	173		須恵器	坏	口縁	(14.3)	—	—	ロクロ	青灰	青灰	灰白	良　良	〃
	174		須恵器	—	—	—	—	—	けずり・内面ロクロ	灰白	灰白	灰白	良　良	〃　[illegible]などのふさいだ部分か

挿図No	遺物No	図版No	種別	器種	残存部位	寸法 口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	成形方法・器形の特徴	色調 外面	内面	断面	胎土・焼成	出土地点・その他
	175		須恵器	坏	底	—	(8.4)	—	ロクロ・つけ高台	灰白	灰白	灰白	良　良	大村分布No. 2
	176		須恵器	坏	底	—	(10.0)	—	ロクロ	濃青灰	ウス青灰	青灰	良　良	〃
21	177		須恵器	坏蓋	端部	(15.7)	—	—	ロクロ	ウス青灰白	青灰	青灰	良　良	〃
	178		須恵器	坏蓋	端部	(17.7)	—	—	ロクロ	ウス茶白	灰白	灰白	良　良	〃　生やけか
	179		灰釉陶器	—	—	—	—	—	ロクロ・精器面あれ	灰白	灰白	灰白	良　堅緻	〃
	180		須恵器	—	頸	—	—	—	ロクロ	黒灰	黒灰	黒灰	良　良	〃
	181		須恵器	—	口縁	(37.0)	—	—	ロクロ	青灰	青灰	灰赤	良　良	〃
	182		土師質土器	—	底部近く	—	(18.4)	—	ロクロ	ウス茶白	茶白	茶白	良　小白粒含　良	〃　細かた目のもの
	183		灰釉陶器	坏	口縁	(10.8)	—	—	ロクロ	灰白	ウス黄緑	灰白	良　堅緻	〃
	184		灰釉陶器	—	底	—	(9.3)	—	内面ロクロ・底ヘラ切り	灰白	灰白	灰白	良　堅緻	〃
	185		土師器	高坏	坏	—	(3.1)	—	ロクロ	茶	茶	茶	良　良	〃
	186		陶器	坏	底	—	(3.8)	—		ウス緑茶黒	ウス緑茶黒	灰白	良　堅緻	〃　内外面釉　貫入あり
	187		陶器	灯明皿	口縁	(9.5)	—	—	ロクロ	ウス茶白	ウス緑乳白	ウス茶白	良　堅緻	〃　釉内面と外面端部にあり
	188		須恵器	…	底	—	(9.4)	—	ロクロ・糸切底	青灰	青灰	青灰	良　良	大村分布No. 3．4
	189		灰釉陶器	坏	底	—	(8.5)	—	ロクロ・つけ高台	灰白	灰白	灰白	良　堅緻	〃
	190		須恵器	坏蓋	端	(15.8)	—	—	ロクロ	灰白	灰白	灰白	良　良	〃
	191		須恵器	長頸瓶	頸	—	—	—	ロクロ・内面しぼり痕あり	青白	灰白	ウス灰赤	良　良	〃
	192		須恵器	—	肩	—	—	—	ロクロ	青灰	青白	にぶい赤灰	良　良	〃
	193		須恵器	—	—	—	—	—	外面タタキ目・内面ナデ	ウス青灰	ウス青灰	灰白	良　良	〃
	194		須恵器	甕	胴	—	—	—	タタキ目・ナデ	灰白	灰白	灰白	良　良	〃
	195		須恵器	甕	胴	—	—	—	タタキ目	青灰	灰白	灰白	良　良	〃
	196		須恵器	甕?	頸	—	—	—		灰ネズ	灰白	灰白	良　良	〃　沈線と波状文
22	197		須恵器	坏	口縁	(12.6)	—	—	ロクロ	青灰	灰白	灰白	良　良	大村分布No. 6
	198		須恵器	坏	底	—	(10.3)	—	ロクロ・糸切底	青灰	青灰	青灰	良　良	〃
	199		須恵器	瓶	—	—	—	—		青灰	青灰	赤灰	良　良	〃　瓶の頸としてつけた部分
	200		土師器	甕	底	—	(10.4)	—	ナデ	茶褐	茶褐	茶褐	良　良	〃　無文
	201		須恵器	坏蓋	端	(13.4)	—	—	ヘラけずり・内面ロクロ	青灰	青灰	青灰	良　良	〃
	202		須恵器	坏蓋	端	(14.1)	—	—	ロクロ	青灰	青灰	灰白	良　良	〃
	203		土師質土器	—	底	—	(9.1)	—	ロクロ	黄茶	黄茶	黄茶	良　良	〃
	204		陶器	小形壺	底	—	(16.4)	…	ロクロ・底けずり	黄茶	茶黄	赤茶	良　堅緻	〃
	205		陶器	こね鉢	口縁	(19.0)	—	—		黄白	黄白	灰白	良　堅緻	〃　両面釉

挿図No.	遺物No.	図版No.	種別	器種	残存部位	寸法			成形方法・器形の特徴	色調			胎土・焼成	出土地点・その他
						口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)		外面	内面	断面		
	206		陶器	茶碗	底	—	(4.5)	—	ロクロ	ウス緑	ウス緑	灰白	良　堅緻	大村分布No. 6　両面ウス緑釉貫入底内部鉄釉
	207	21	土師器	甕	口縁	(23.4)	—	—	ロクロ・内面上部ハケ目	ウス茶	茶橙	茶	良　良	〃
	208	21	土師器	甕	胴下	—	—	—	外面タテハケ目・内面まきあげか調整不良凹凸あり	茶橙	こげ茶	茶	良　良	〃
	209	21	土師器	甕	底	—	(9.9)	—	底部外面厚くもり上がる・内面強い圧痕あり	黒茶	茶褐	茶褐	良　良	〃
23	219		須恵器	坏	底	—	(8.3)	—	ロクロ・糸切	青灰	青灰	青灰	良　良	〃
	211		須恵器	坏	底	—	(7.4)	—	ロクロ・糸切	ウス青灰	ウス青灰	ウス青灰	良　良	〃
	212		須恵器	坏皿	1／4	15.0	—	3.0	外ヘラけずり・内ロクロ	青灰	青灰	紫青灰	良　小レキ　良	〃　端部及内面外側灰白色
	213		須恵器	甕？	底	—	(8.3)	—	ロクロ	灰白	灰白	灰白	良　白色粒含　良	〃
	214		須恵器	—	—	…	—	—	タタキ目同心円文	暗灰	暗灰	灰赤	良　小白粒含　良	〃
	215		須恵器	坏蓋	…	(16.7)	—	—	外ヘラけずり・内ロクロ	青灰	青灰	青灰	良　良	〃　外面端部灰黒色
	216		須恵器	短頸壺	頸	(11.7)	—	—		青灰・灰白	青灰・灰白	灰白	良　精やわらか器面あれ	〃
	217		灰釉陶器		底	—	(11.4)	—	内ロクロ・底ヘラ切り・つけ高台	灰白	灰白	灰白	良　小粒含　堅緻	〃
	218		須恵器	—	底	—	(12.6)	—	内、外ロクロナデ	灰白一部青黒	灰	灰赤	良　良	〃
	219		須恵器	—		—	—	—	ロクロ	灰白	灰白	灰赤	良　良	〃
	220		須恵器			—	—	—	ロクロ	灰白	灰白	灰赤	良　良	〃
	221		須恵器	甕	胴	—	—	—	タタキ目・内面ナデ	灰白	灰白	灰赤	良　良	〃
	222		須恵器	甕	…	—	—	—	タタキ目・内面ヨコナデ・外面緑茶色の釉ハケ	灰白	灰白	灰白	良　良	〃
	223		陶器	—	—	—	—	—	まき上げロクロ・釉濃くかかる	うぐいす色	うぐいす色	赤茶ねずみ	良　堅緻	〃
	224		土師質土器	埦	口縁	(12.7)	—	—	ロクロ	白茶	白茶	白茶	良　良	〃
	225		陶器	小鉢	口縁	(12.8)	—	—	ロクロ	にぶい褐	にぶい褐	にぶい橙	良　堅緻	〃

表4　石器一覧表

挿図No.	遺物No.	図版No.	出土採集地	器種	寸法 長さ cm	巾 cm	厚さ cm	重量 g	石質	備考
1	17	14	2住	打製石斧	10.6	5.1	1.4	82.2	粘板岩	
2	33		ミゾNo.1	石鏃	1.9	1.6	0.3	0.81	黒曜石	
5	65	17	58- No.1地点	凹石	5.3	5.6	1.8	64.7	安山岩	惣社地区表採遺物
〃	66	18	〃 No.2 〃	打製石斧	10.0	6.8	1.6	127.0	緑色凝灰岩	〃
〃	70	17	〃 No.6 〃	凹石	18.0	19.3	9.2	4100.0	安山岩	〃
6	74	18	〃 No.13 〃	打製石斧	11.0	5.5	2.2	122.9	粘板岩	〃
〃	76	18	〃 No.15 〃	〃	(4.6)	4.5	1.5	(42.1)	砂質粘板岩	〃
〃	77	18	〃 No.25 〃	〃	13.7	6.1	4.0	410.0	粘板岩	〃
7	86	18	〃 No.30 〃	〃	(8.0)	3.6	2.3	(108.3)	〃	〃
〃	93	18	〃 No.36 〃	〃	(7.4)	6.3	2.2	(109.7)	粘板岩・砂岩	〃
〃	97	18	〃 No.45 〃	凹石	6.7	7.8	4.3	263.5	砂岩	〃
8	98	17	〃 〃 〃	〃	9.5	10.4	7.0	850.0	〃	〃
〃	113	18	〃 No.69 〃	打製石斧	(6.0)	6.4	1.8	(67.1)	緑色凝灰岩	〃
9	131	18	〃 No.72 〃	〃	11.3	7.6	1.8	224.1	石墨板岩	〃
〃	132	20	〃 〃 〃	凹石	11.3	11.4	8.4	1190.0	安山岩	〃
10	133	20	〃 No.76 〃	〃	16.3	14.7	5.9	1620.0	砂岩	〃
〃	134	20	〃 〃 〃	〃	10.5	14.0	4.5	655.0	〃	〃
			57- No.6 〃	打製石斧	(9.8)	5.0	1.9	(141.5)	粘板岩	大村地区表採遺物
			〃	〃	(5.9)	5.4	2.3	(83.7)	〃	〃

表5　鉄製品一覧表

挿図No.	遺物No.	図版No.	出土採集地	器種	寸法 長さ cm	巾 cm	厚さ cm	重量 g	備考
1	18	14	2住No.8	釘状製品	4.0	1.6	1.4	8.3	
〃	19	14	2住No.2	刀子	9.4	2.3	0.6	26.1	
2	34	14	ミゾ1	釘状製品	2.9	1.2	0.9	5.2	
〃	35	14	〃	〃	3.7	0.6	0.6	2.9	
〃	36	14	〃	〃	2.3	0.7	0.5	2.1	
4	64	14	検出面	刀子状製品	11.3	3.2	0.6	49.9	
8	100	21	No.49地点	古銭					銭名不明　惣社地区表採

図　版

桑園近景

発掘状況
表土はぎ

発掘状況

発掘状況
第2号住居址

溝状遺構
(西より)

溝状遺構他
(南より)

発掘状況

発掘状況

現地指導

現地指導

第１号住居址
（東より）

同ピット

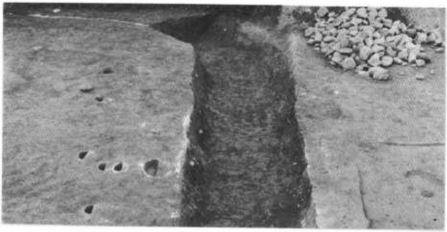
第2号住居址
（西より）

同遺物出土状況

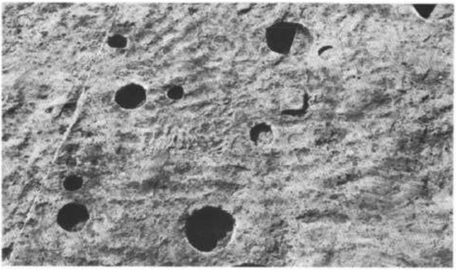
溝状遺構
遺物出土状況

溝状遺構

溝状遺構
掘り上げ状況



溝状遺構
東端部



ピット群

礫群
(東より)

礫 群
(西より)

礫群
東寄り部分

溝状遺構確認
グリット
(南西屈曲部)

発掘地区
掘り上げ全景(1)

発掘地区
掘り上げ全景
（北より）

埋め戻し作業

調査参加者

分布調査地（1）

No.77

No.22

No.25

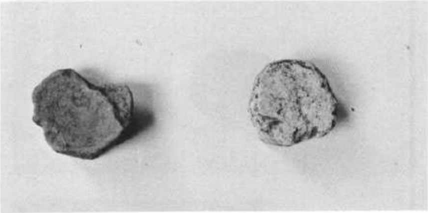
分布調査地（2）
No.36

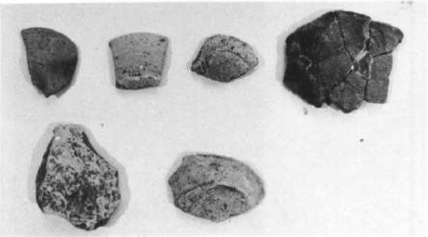
No.38

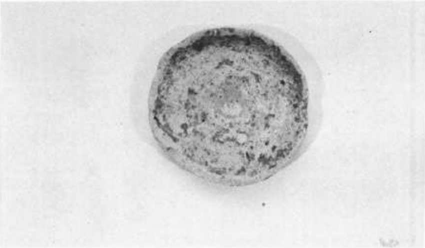
No.56

分布調査地
No.30

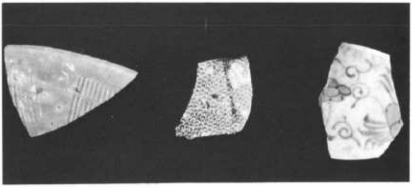
発掘地点より
東南の伊和神社
(遠方の森)を望む


出土遺物 (1)
43・20


1・22・11・3
12・23

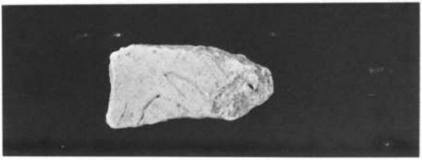

2

出土遺物(2)
30・51・63



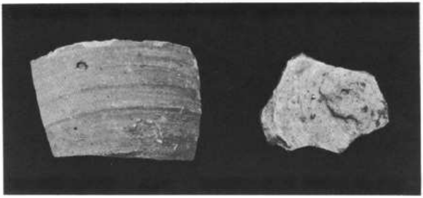
17

19・18
64　34・35・36

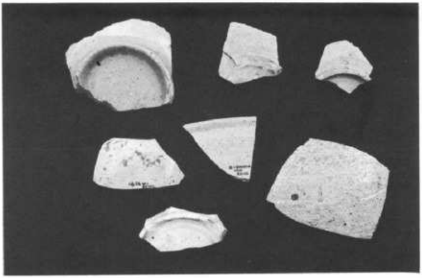


出土遺物(3)

57



58・45



15・25・26
49・13
48 ・ 16

分布調査
表採遺物(1)

81

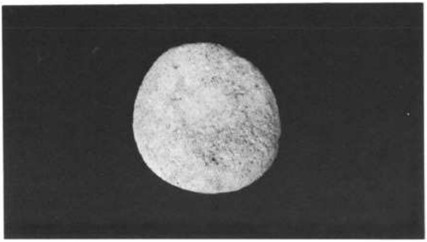
79
（表面）

79
（裏面）

90・103・108

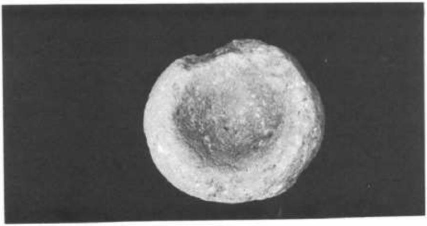
分布調査
表採遺物(2)

65



70

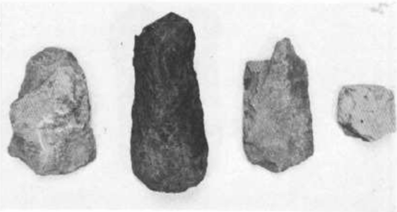
98



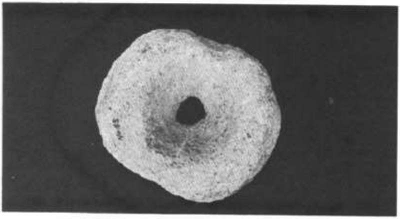
分布調査

表採遺物(3)

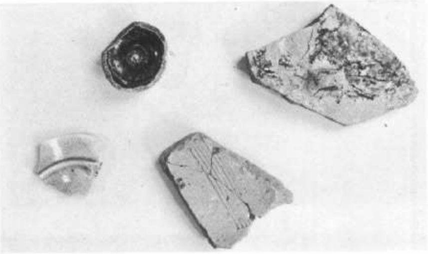
66・77・74・76



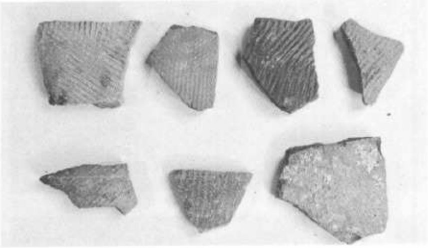
97



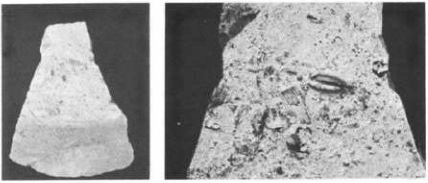
86・93・113・131



分布調査
表採遺物(4)
102・71
96・130



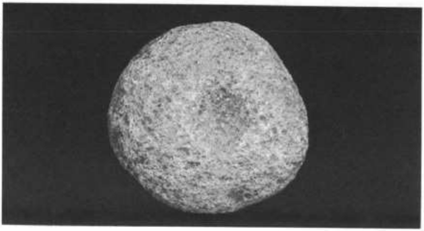
80・92・99・101
119・117・94



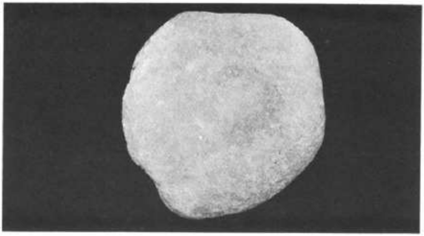
127
(右、拡大図穀粒痕

分布調査
表採遺物(5)

132



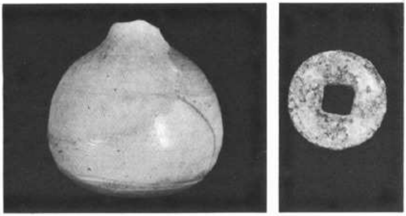
133



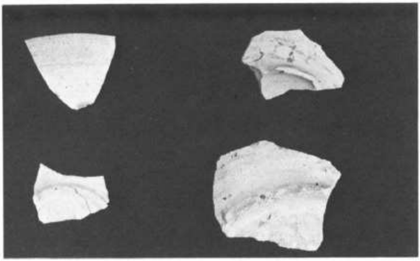
134

分布調査
表採遺物(6)

209・208・207



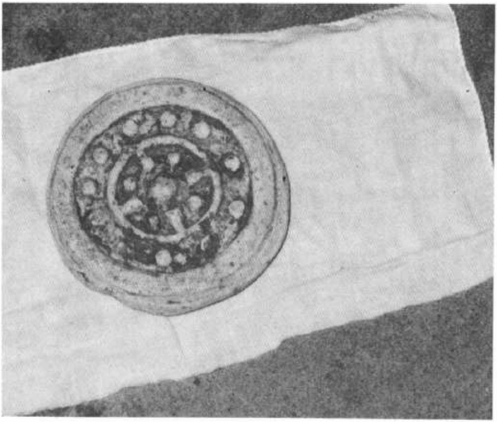
131・100



159・124
67 ・ 72

図版22

軒丸瓦
大村堂田出土



木鼻
大村堂田出土

松本市文化財調査報告No.33

－推定信濃国府第二次発掘調査報告書－

昭和59年3月20日　印刷
昭和59年3月31日　発行

発行　松本市教育委員会
印刷　株式会社綜合印刷